

平成8年度

市原市内遺跡発掘調査報告

いち	はら	じょう	り	せい	い	せき
市	原	条	里	制	遺	跡
しい	づ	ご	りょう	だい	い	せき
椎	津	五	霊	台	遺	跡
きく	ま	て	なが	い	せき	跡
菊	間	手	永	遺	跡	
しも	や	た	じょう	あと	跡	
下	矢	田	城	跡		
ふつ	か	いち	ば	い	せき	跡
二	日	市	場	遺	跡	

1997・3

市原市教育委員会

序 文

房総半島の西側中程に位置する市原市には、太古より多くの人々が生活を営んできた証である、遺跡が数多く存在しています。その代表として、「王賜」銘鉄剣や全国一の規模を誇る上総国分尼寺跡などが上げられます。

しかし、埋蔵文化財という宿命から、開発との狭間で、その保存については大きな問題となっておりますことはご承知のとおりです。市原市におきましても首都圏の中で、宅地造成やゴルフ場、残土処分場など様々な工事が予定され、文化財保護との調和が急務の課題となっております。

一方、国民固有の財産であるこれらの埋蔵文化財を生涯学習等に活用することにも努力を払わねばなりません。「不毛の時代」といわれる今日、文化財の保護をはかるとともに、その活用は未来を見据えた「心の豊かさ」をもつ手段として大いに考えてゆかなければなりません。

本書は、国庫および県費の補助を受けて発掘調査を実施した市内の遺跡の報告書ですが、市原市の歴史を理解するための一助になればと願っております。

最後に、今回の調査を実施するにあたり、ご指導、ご協力を賜りました、文化庁、千葉県教育委員会、財団法人市原市文化財センターならびに関係諸機関に対しまして、心より感謝の意を表する次第であります。

平成9年3月

市原市教育委員会
教育長 大野 皎

例 言

- 1 本書は、国庫および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は文化庁の国庫補助事業として助成金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書印刷刊行については市原市教育委員会で行なった。
- 3 今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。
 - (1) 市原条里制遺跡（センター調査コード セ223）市原市菊間字六淵弁才天267、268-1
調 査 給油所建設に伴う確認調査で、調査対象面積1,582㎡のうち34㎡を発掘調査した。
調査期間 平成8年4月8日～平成8年4月11日
 - (2) 椎津五霊台遺跡（センター調査コード セ224）市原市椎津字五霊台662,663
調 査 宅地造成に伴う確認調査で、調査対象面積2,977㎡のうち298㎡を発掘調査した。
調査期間 平成8年4月15日～平成8年4月25日
 - (3) 菊間手永遺跡（センター調査コード セ225）市原市菊間字手永2,183
調 査 個人住宅建設に伴う調査で、調査対象面積263.95㎡のうち190㎡を発掘調査した。
調査期間 平成8年4月12日～平成8年5月22日
 - (4) 下矢田城跡（センター調査コード セ229）市原市下矢田字金谷192
調 査 公民館建設に伴う確認調査で、調査対象面積520㎡のうち52㎡を発掘調査した。
調査期間 平成8年5月23日～平成8年6月10日
 - (5) 二日市場遺跡（センター調査コード セ233）市原市二日市場599の一部
調 査 公民館建設に伴う確認検査で、調査対象面積194.25㎡のうち30㎡を発掘調査した。
調査期間 平成8年7月29日～平成8年7月31日
- 4 現地調査ならびに整理作業・原稿執筆については、(1)、(3)、(4)、(5)を小出紳夫が、(2)を高橋康男が担当した。また、(3)のうち貝ブロックの記述については、忍澤成視が担当した。
なお、中世遺物の観察・分類については、櫻井敦史氏の助力を得た。
- 5 本書に使用した地形図は市原市発行の1：10,000地形図および1：2,500地形図である。
- 6 本書で遺構配置図および遺構平面図中に使用した北は、磁北を示している。また、遺構断面図中の高さは市原市発行1：2,500の地形図中に記載されていた標高を利用しているため、厳密な水準ではない。
- 7 調査区の設定は、現地に則した任意の座標を使用した。

本文目次

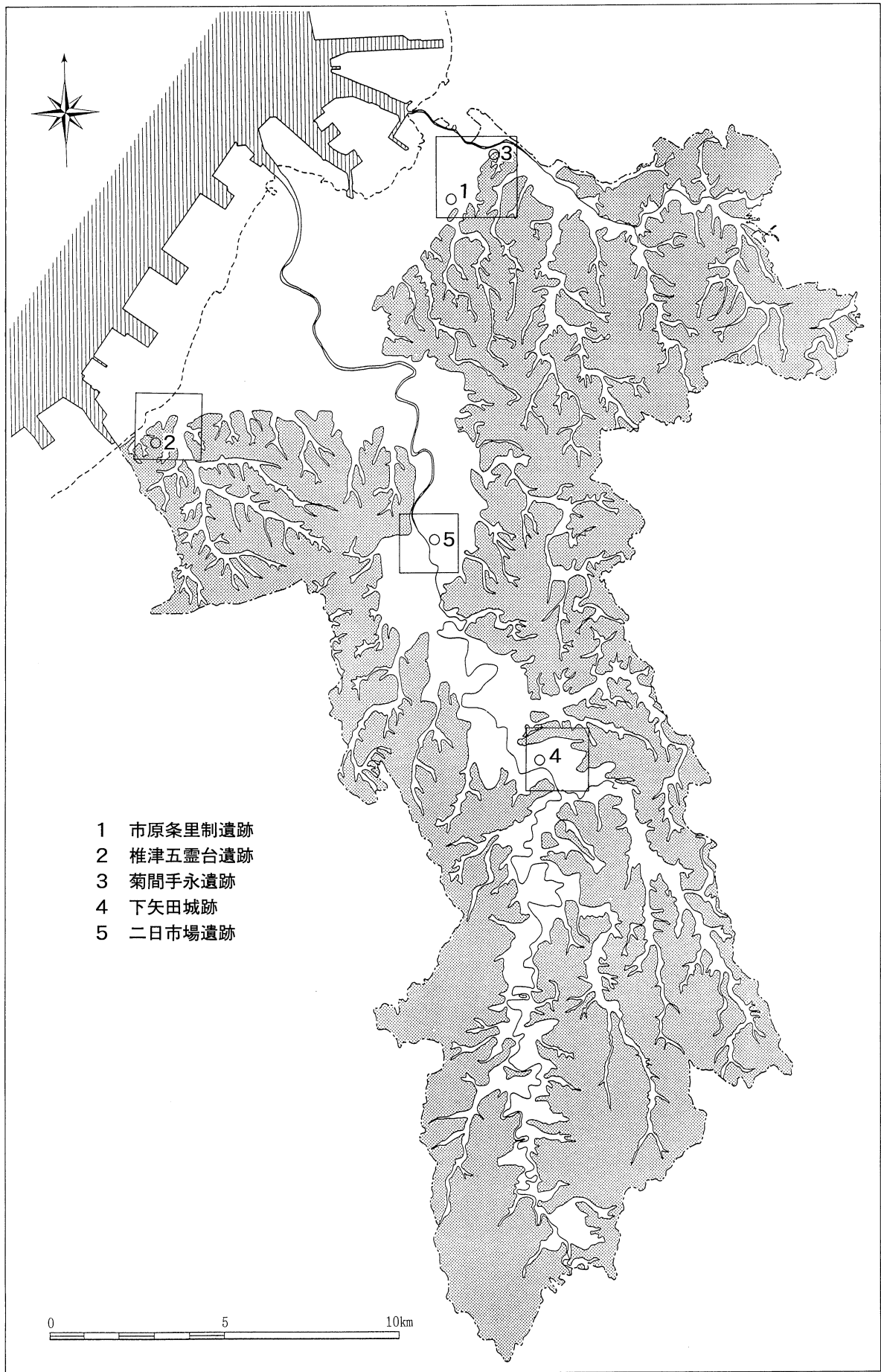
序文	
例言	
調査遺跡の位置	1
第1章 市原条里制遺跡	3
第2章 椎津五霊台遺跡	5
第3章 菊間手永遺跡	8
第4章 下矢田城跡	15
第5章 二日市場遺跡	17

挿図目次

第1図 平成8年度「市内遺跡」調査位置図	1
第2図 各調査遺跡の位置	2
第3図 市原条里制遺跡周辺地形図	3
第4図 市原条里制遺跡全体図および出土遺物	4
第5図 椎津五霊台遺跡周辺地形図	5
第6図 椎津五霊台遺跡全体図および出土遺物	7
第7図 菊間手永遺跡周辺地形図	8
第8図 菊間手永遺跡全体図	9
第9図 1・2号地下式壙実測図	10
第10図 3・4号地下式壙および住居跡実測図	11
第11図 菊間手永遺跡出土遺物	13
第12図 菊間手永遺跡出土中世遺物	14
第13図 下矢田城跡周辺地形図	15
第14図 下矢田城跡全体図および出土遺物	16
第15図 二日市場遺跡周辺地形図および全体図	18
第16図 二日市場遺跡出土遺物	19

写真図版目次

図版1	市原条里制遺跡・椎津五霊台遺跡
図版2	菊間手永遺跡
図版3	下矢田城跡・二日市場遺跡
図版4	各遺跡出土遺物



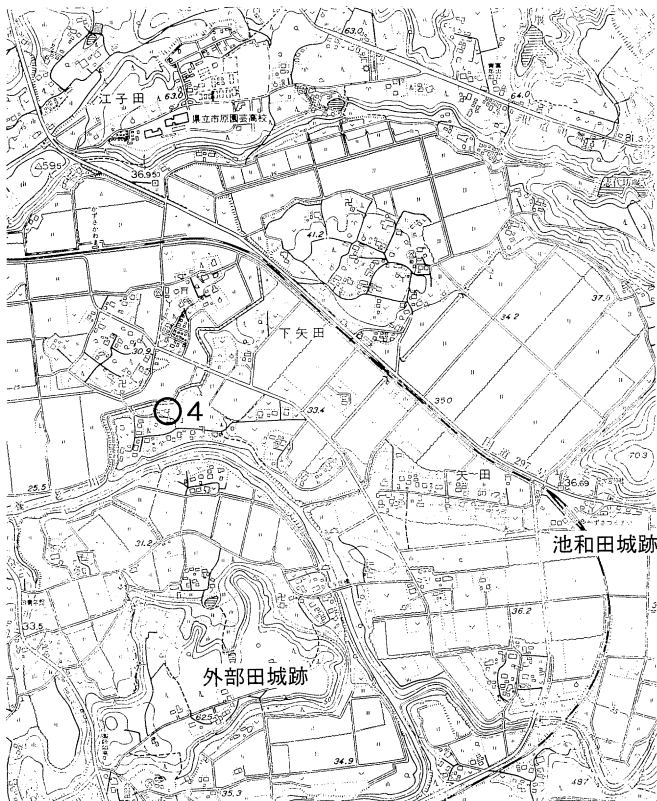
第1図 平成8年度「市内遺跡」調査位置図



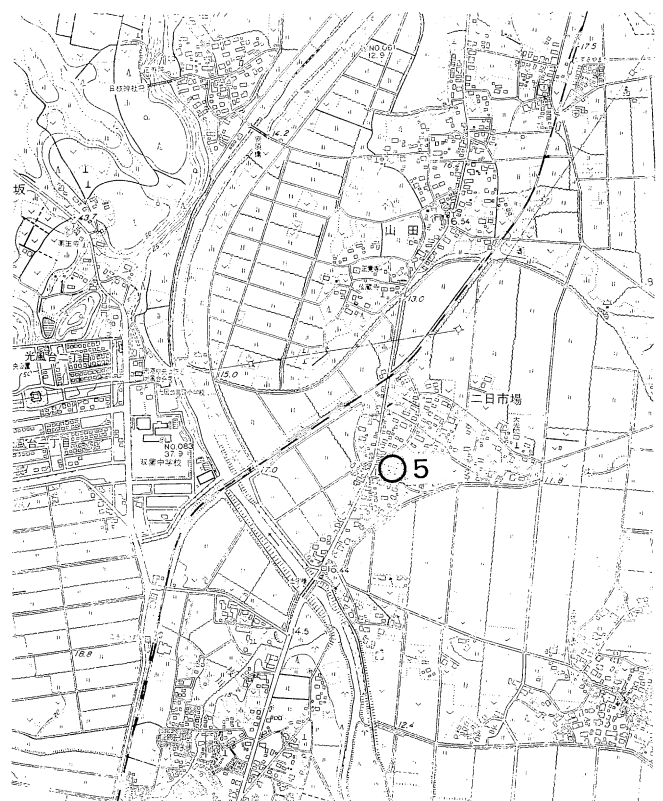
1 市原条里制遺跡 3 菊間手永遺跡



2 椎津五霊台遺跡

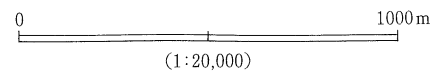


4 下矢田城跡



5 二日市場遺跡

第2図 各調査遺跡の位置



第1章 市原条里制遺跡

調査の概要

市原条里制遺跡は、市原台地の北西に広がる標高5 m前後の沖積低地上に立地する。当遺跡を含む周辺は昭和63年から平成5年にかけて、高速道路建設（東関東自動車道—館山線）に伴う発掘調査を実施しており、その結果、古代から中世までの条里地割の畦畔・水路などの水田跡と縄文時代・弥生時代の貝塚および平安期の古代道路跡などが発見されている。現況では水田面の上に1 m以上の客土をしていることなどから、調査は、対象地に2ヶ所のトレンチを設定して発掘を行なった。

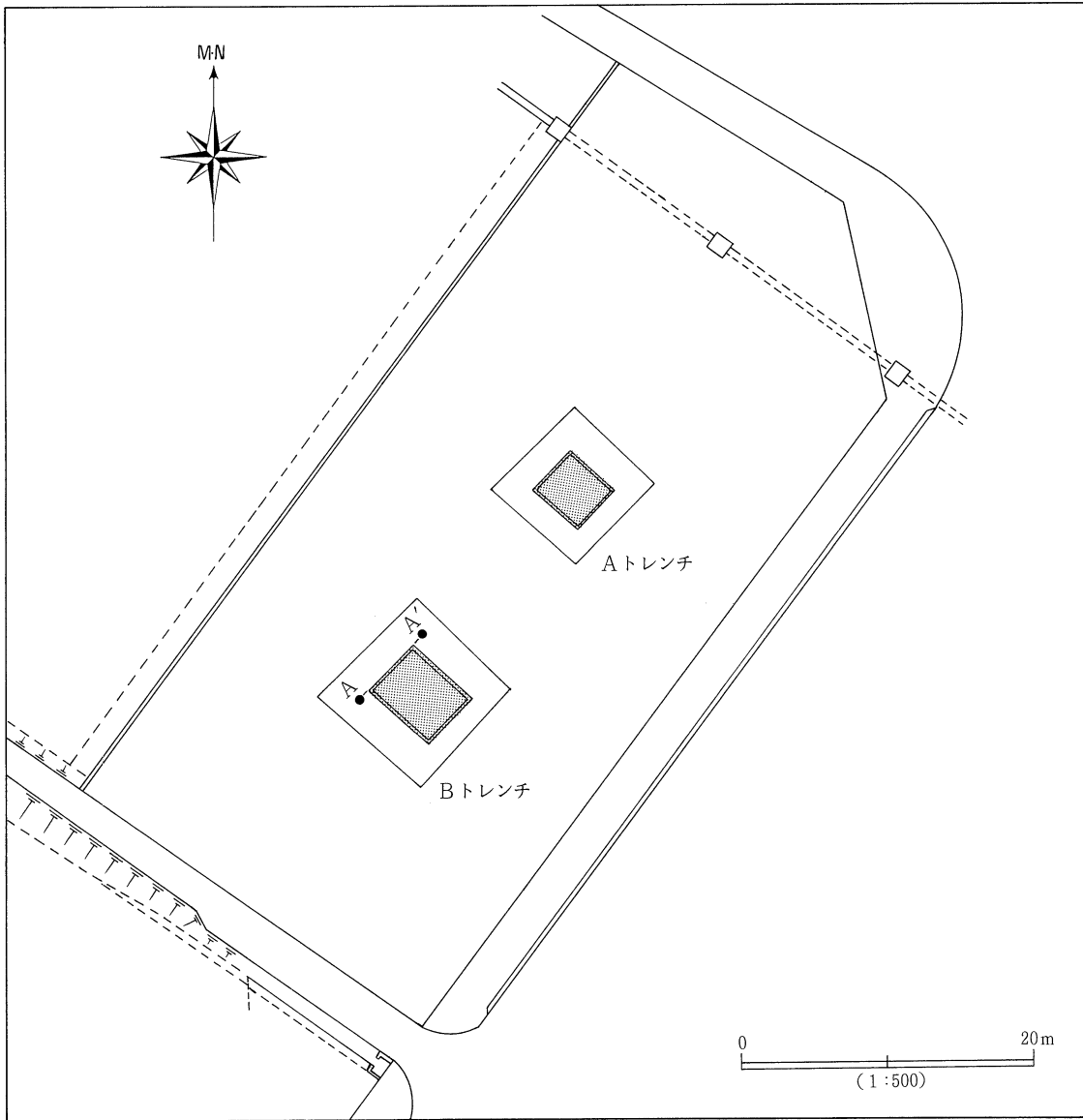
調査の結果、当初予想された条里に伴う水田跡は検出されなかった。調査地区の基本的な層序は、1・2層が灰褐色土、3・4層が灰褐色シルト質土、5・6層が暗灰色・黒色粘質土、7層が灰色シルト質砂層、8層が灰オリーブ色粘土層となっている。（第4図参照）

遺物については、小片で器形の分かるものは少なかったが、4層灰褐色シルト質土から中・近世の遺物を、5層、6層の暗灰色・黒色粘質土からは、土師器片のみ出土している。このうち、図にしえた遺物が第4図で、1は北宗銭（元祐通寶？）、2は志野釉丸皿とともに4層から出土している。

今回の調査では、調査区が小規模のため水田等の遺構はつかめなかったが、今後周辺で調査が行なわれる場合、5・6層の暗灰色・黒色粘質土層部分を面的に精査する必要がある。



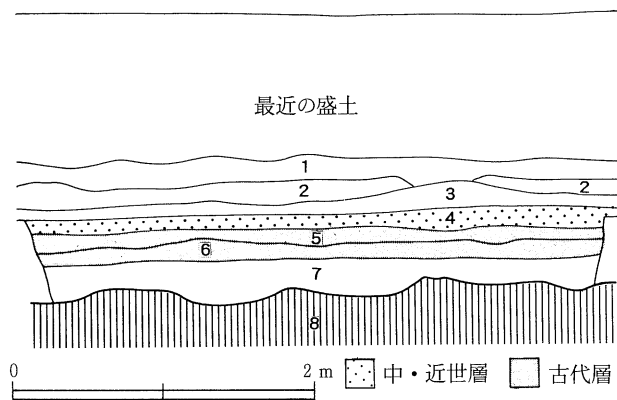
第3図 市原条里制遺跡周辺地形図



調査区域トレンチ配置図

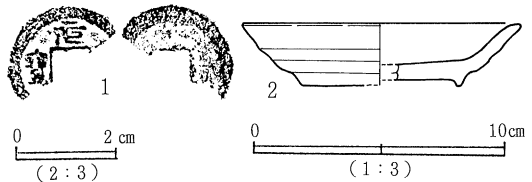
A 5.200m

A'



Bトレンチ土層断面図 (1:50)

1. 灰褐色土層 (7.5YR5/0) 現水田耕作層
2. 灰褐色土層 (7.5YR4/2) キシャゴ・アサリの貝破片を多く含む
3. 灰褐色シルト質土層 (7.5YR4/2) 細砂混じりのシルト質土
4. 灰褐色シルト質土層 (7.5YR5/2) 粘性強い
5. 暗灰色粘質土層 (N3/0) 粘性強い シルト層の様に均質な土質。
6. 黒色粘質土層 (N2/0) 粘性強い 白色粒子・植物遺存体を多く含む。
7. 灰色シルト質砂層 (5Y5/2) やや還元状態。植物の泥炭化物を含む。
8. 灰オリブ色粘土層 (7.5YR5/2) 地山



Bトレンチ出土遺物

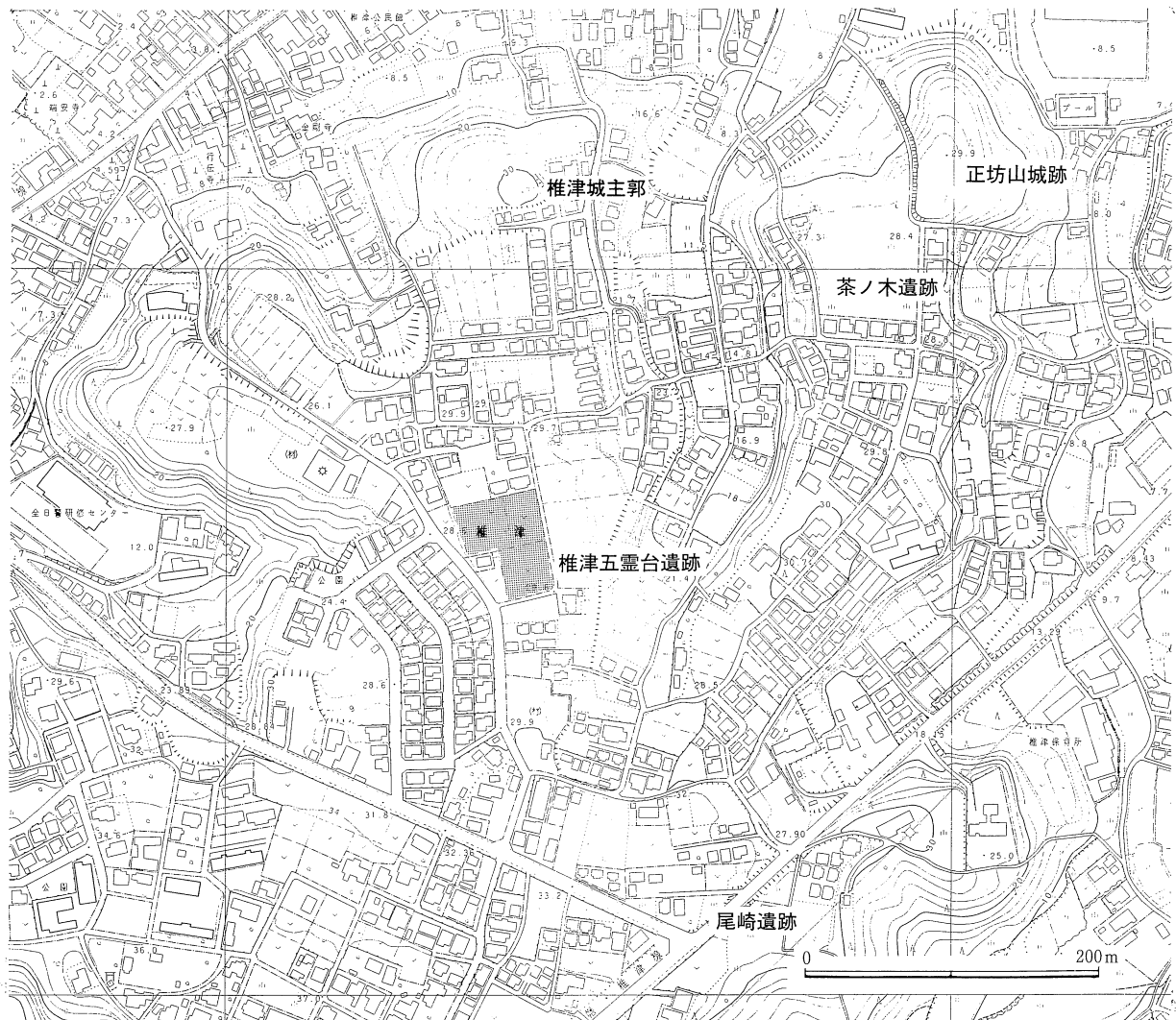
第4図 市原条里制遺跡全体図および出土遺物

第2章 椎津五霊台遺跡

調査の概要

椎津五霊台遺跡は、姉崎の市街地の背後にひろがる標高約30mの台地上にある。台地の先端部には、市原市における代表的な中世城郭である椎津城跡の主郭がある。椎津城については、戦国時代に築かれたものとされているが、城の本来の規模等については不確定な部分も多い。主郭の周辺には堀の痕跡や郭の痕跡と考えられる地形が残っているが、周辺地形図にみられるとおり、宅地化が進行しており、城の名残を留める部分は減少の一途を辿っている。五霊台遺跡はこの主郭の南方約200mの比較的平坦な場所に広がっている。この平坦な部分についても、城として取り囲まれていたとする考えもある。(1)

近隣における、最近の発掘調査例としては、千葉県教育委員会による椎津城跡の確認調査(2)、本遺跡の北東約300mに所在する椎津茶ノ木遺跡(3)、南東約300mに所在する椎津尾崎遺跡(4)等の例をあげることができる。茶ノ木遺跡は、古墳時代後期を中心とする約200軒の住居跡が調査されている。尾崎遺跡では平安時代のすり鉢状土坑や中世の墓壇群が検出され、すり鉢状土坑には、大量の貝が投棄



第5図 椎津五霊台遺跡周辺地形図 (1/5000)

されており、魚骨を含まないところから、貝の加工場の可能性も考えられている。

調査は、4 m × 4 m のグリッドを調査対象地全域に均等に配置することを基本としたが、状況に応じて拡張した部分もある。なお、グリッド番号については、着手順に付した。

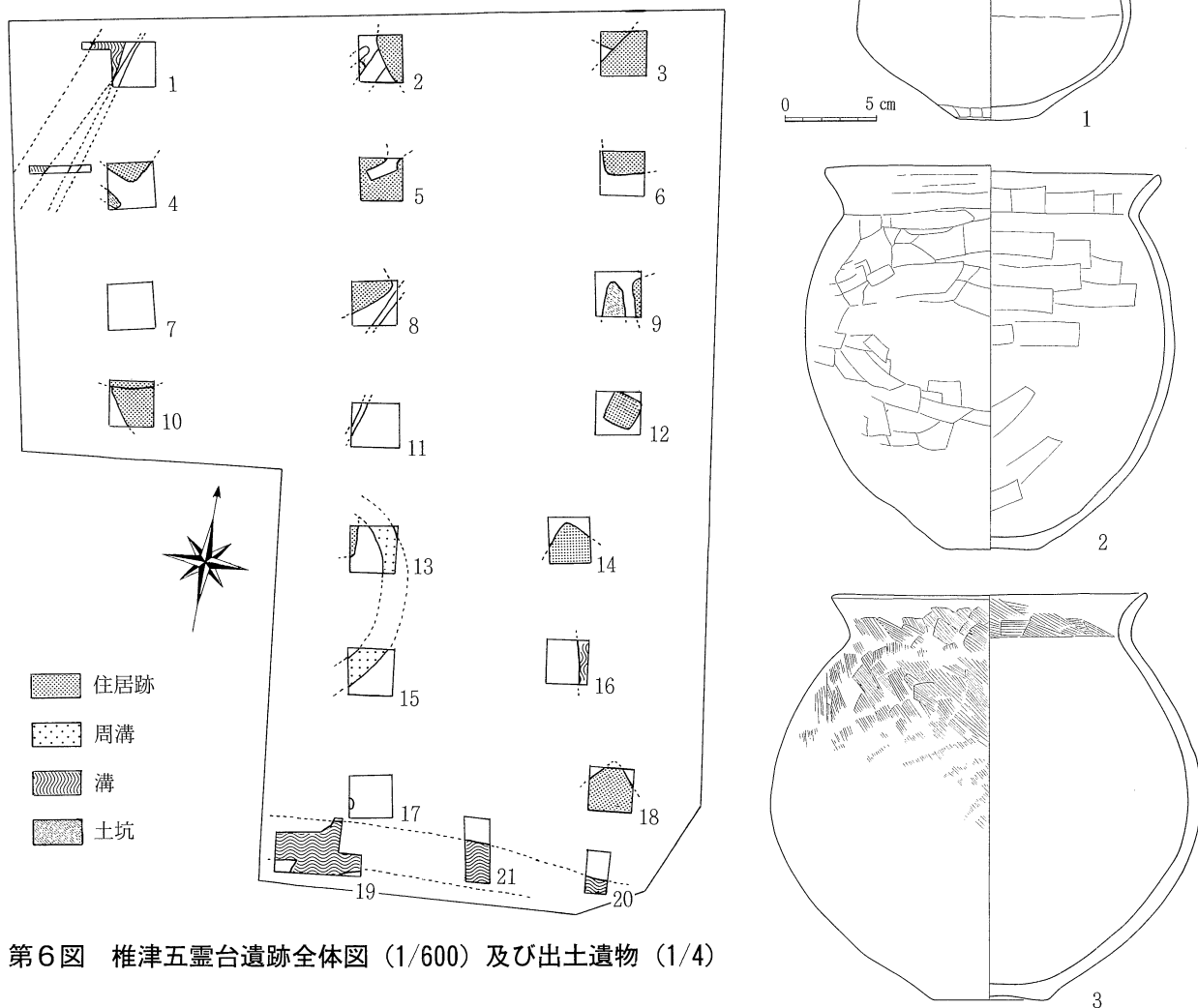
調査の結果、図示したようにほぼ全グリッドにおいて遺構が確認された。一部の遺構に関しては、サブトレンチを設定し、掘り込みの深さあるいは、遺構の時代についての手掛かりを得るようつとめた。遺跡の中心となるのは、古墳時代前期を中心とする住居跡であり18軒確認された。平面形が方形を呈するものが多く、またカマドの痕跡が認められないものがほとんどであった。遺構の重複は一部のグリッドで見られるものの、単独に存在するものが多いと考えられる。その他に周溝を確認した円墳1基(13および15グリッド)、平安時代の住居跡1軒(12グリッド)、土坑6基がある。なお、カマドに関しては、12および18グリッドにおいて構築材と思われる粘土の散布がみられたが、12グリッドにおいては、北隅に偏在しているところからいわゆるコーナーカマドと考えられ、住居規模も一辺3 mに満たないところから平安時代の所産と判断したものである。また、調査区の北西隅(1グリッド)および、南縁の各グリッド(19~21)において、比較的掘り込みの深い溝が検出された。これら溝に関しては時代を特定するような遺物の出土は認められなかったが、椎津城関連の遺構と捉えておくのが妥当と考えられる。

遺物については、ほぼ完形に復元しえた3点を図示するにとどめておく。1は、10グリッドから出土した広口壺である。器高11.6cm、口径12.3cm、底径4.5cm、頸部径12.1cm、胴部最大径15.0cmを測る。内外面共器壁は緻密で、全面的にミガキをかけられている。とくに内面は丁寧に磨かれており、光沢がある。内面上半には、粘土紐の痕跡をとどめる部分がある。同様に外面上半の器表面も僅かに凹凸をのこしており、下半の整形よりやや雑な感じがある。また、器壁の厚さについても、胴部下半よりも上半の方が厚いことが認められる。底部外周には横方向のケズリがみられ、底は若干丸みをおび、平坦ではない。2は、8グリッドから出土した甕である。器高21.0cm、口径18.2cm、底径4.5cm、頸部径16.2cm、胴部最大径20.2cmを測る。外面の整形は一部不明瞭な部分があるが、横方向のナデを基本とする。内面については、上半では横方向のナデ、下半では右上がりのナデを基本とする。頸部については内外面共に横方向のナデを基本とするが外面については、工具の痕跡は内面ほど明瞭ではない。なお、外面はほぼ黒褐色を呈しているが、口縁から胴部にかけて液体がこぼれた様な痕跡があり、その部分だけが、土器の地の色である淡赤褐色を呈している。器壁は5~6mmであり、概して薄い観がある。3は、5グリッドから出土した甕である。器高22.2cm、口径17.0cm、底径6.0cm、頸部径15.5cm、胴部最大径23.6cmを測る。外面は、頸部下半から胴部中央にかけてハケメを良く残しているが、途中からハケメの上からナデがほどこされており、ハケの痕跡は次第にうすくなっていき、胴部下半では、ハケメは認められない。内面は、頸部においてハケメを残す以外はナデられている。なお、底部は若干上げ底気味である。

図示した3点の他に、古墳時代前期の土器片が多くみられ、一部奈良・平安時代の土器が出土している。また、土玉、管状土錘も認められる。これらは、先に触れた、椎津茶ノ木遺跡でも多くの出土例があることから、生業の共通性の一端を伺わせるものとして捉える事ができよう。

今回の調査により、遺跡は、古墳時代前期を中心とする集落である可能性が高い。茶ノ木遺跡の前段階に営まれた集落の様相を把握することが可能かも知れない。

なお、椎津城との関連性に関しては、上記の溝の存在により、城の一角を占める可能性が高くなったといえる。ただし、今回の調査の範囲にかぎって言えば、戦国期の遺構・遺物の検出はほとんどな



第6図 椎津五霊台遺跡全体図（1/600）及び出土遺物（1/4）

く、したがって、これら痕跡を留めないような土地利用の有り方を想起するのが妥当であろう。

引用文献

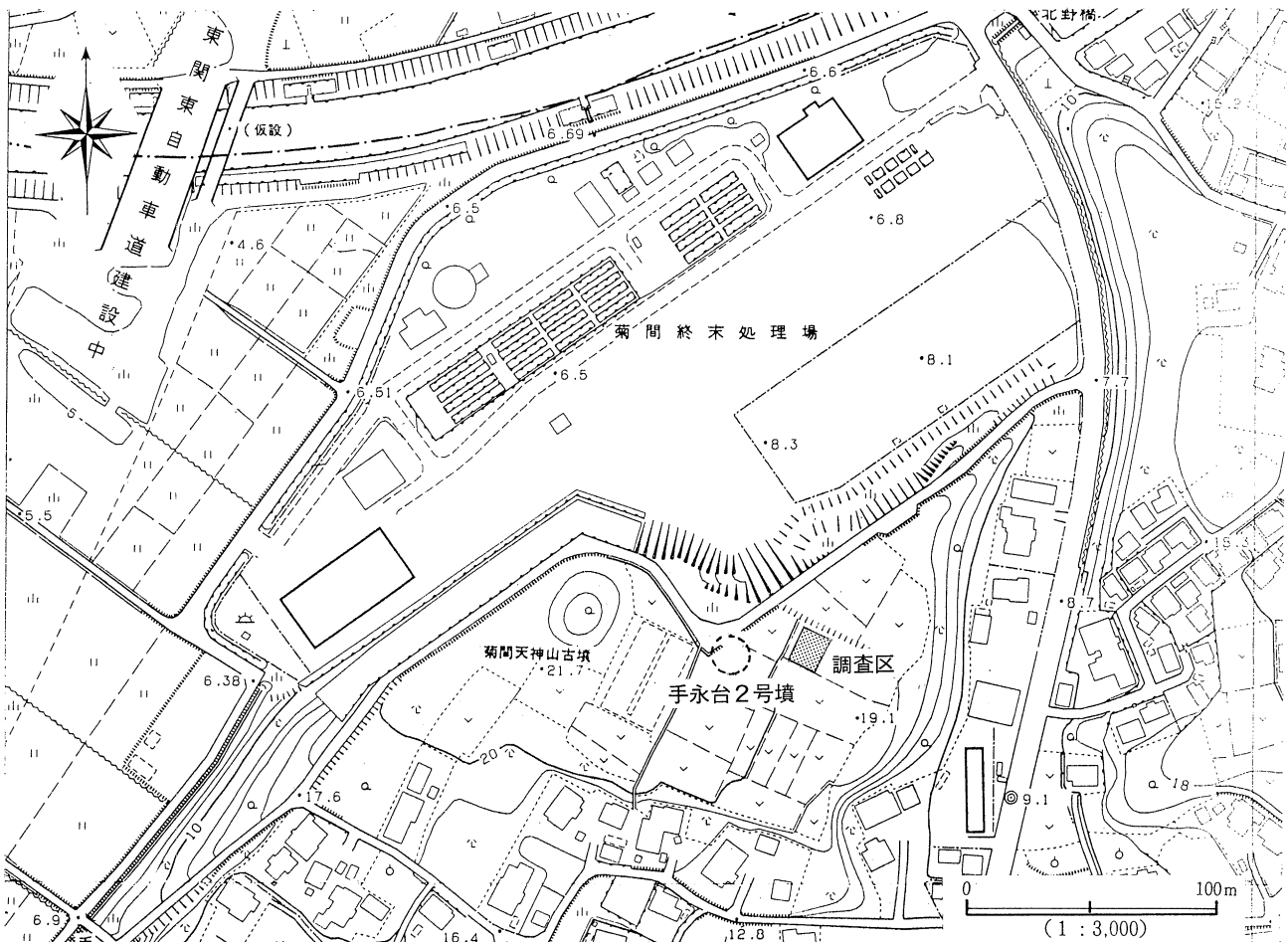
- (1) 八巻孝夫「椎津城跡」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』千葉県教育委員会 1996
- (2) 笹生 衛『千葉県中近世城跡研究調査報告書第10集－椎津城跡・大堀城跡発掘調査報告－』千葉県教育委員会 1990
- (3) 木對和紀他『市原市椎津茶ノ木遺跡』(財)市原市文化財センター 1992
- (4) 櫻井敦史「椎津尾崎遺跡」『第10回 市原市文化財センター 遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター 1995

第3章 菊間手永遺跡

1. 調査の概要

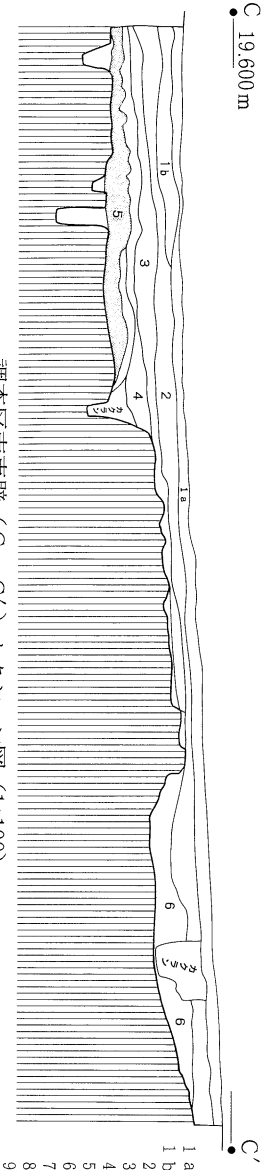
菊間手永遺跡は、村田川が東京湾に流れ込む河口流域を一望できる左岸台地の標高19mに位置する。現在は台地突端という地形となっているが、これは下水処理場建設による台地掘削のためであり、旧状は突端より約150m程奥まったところに位置していたことになる。この地区には、縄文時代後期の馬蹄形貝塚である菊間手永貝塚が所在する。昭和46～47・58年度には、先程の下水処理場建設関連で約15,000㎡の発掘調査を行なった。この調査では、縄文時代から奈良・平安時代・中世までの集落跡、貝塚、古墳群、墓域など重複した遺構が発見されている。縄文時代では、後期の竪穴住居跡、小竪穴をはじめ、安行期の墓域等があり、弥生時代では中～後期の竪穴住居跡、V字型環壕溝が、古墳時代では後期の竪穴住居跡、古墳周溝などが検出され、中世には、地下式墳、土壇墓などを含む区画された墓域が発見されている¹⁾。

今回の調査は住宅建築に伴うもので、影響を受ける部分190㎡について発掘を行なった。調査の結果、調査区北側から台地部分を削り込んだ台地整形区画と地下式墳4基および中世土壇11基、同土坑6基、溝跡1条、弥生時代竪穴住居跡1軒、貝層ブロック2ヶ所を検出した。出土した遺物は、大部分が土師器の小片であったが、その中で顕著なものとしては円筒埴輪片・鉄滓が比較的多く見られた。円筒埴輪片（第11図4～9）については、昭和58年に隣接で行なわれた発掘調査でも出土しており、

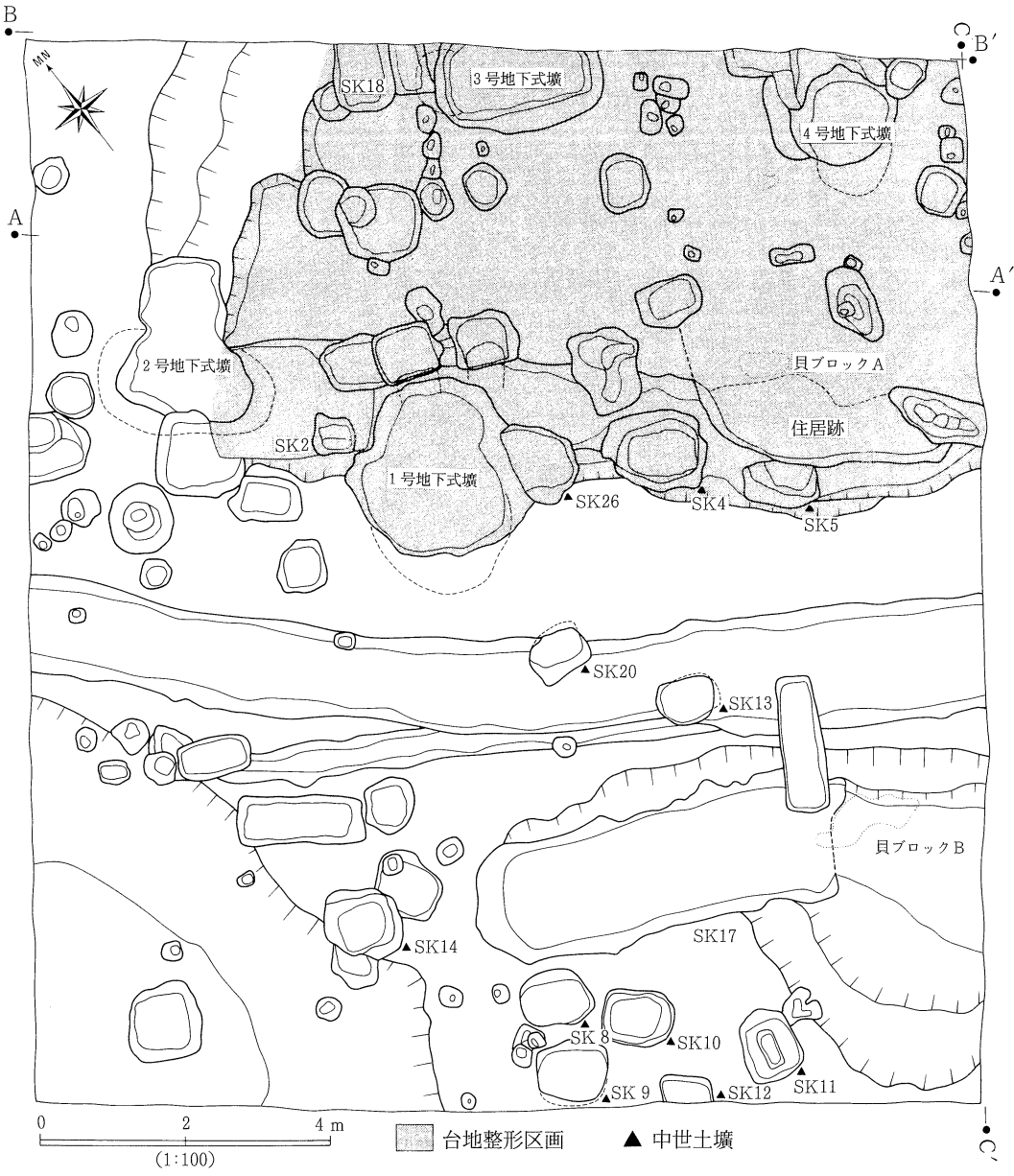


第7図 菊間手永遺跡周辺地形図

C 19.600 m



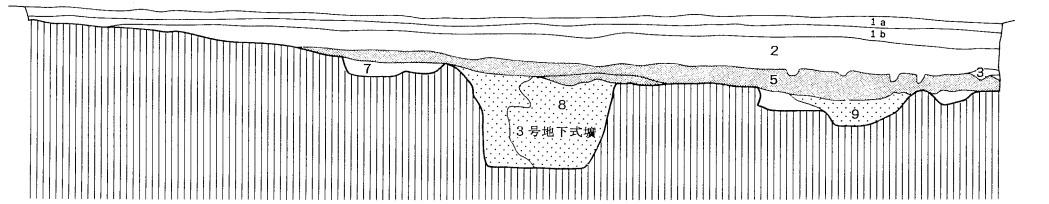
調査区南東壁 (C-C') セクション図 (1:100)



(1:100)

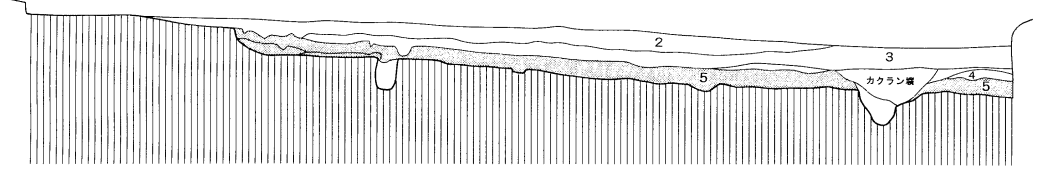
- 1 a. 暗褐色土層 現畑耕作層
- 1 b. 灰褐色土層 ローム粒・ローム土を含む。
2. 暗褐色土層 ローム土を多く含む。近世期に行われた土地掘削土
3. 暗褐色土層 ローム土を多く含む。中世の遺物を含む。
4. 暗褐色土層 砂粒状のローム土を多量に含む。中世の遺物を含む。
5. 黄褐色土層 ローム土を多量に含む。(SK18土坑覆土)
6. 暗褐色土層 ローム土を多量に含む。(3号地下式竈覆土)
7. 暗褐色土層 ローム土を多量に含む。(4号地下式竈覆土)
8. 暗褐色土層
9. 暗褐色土層

B 19.400 m



調査区北東壁 (B-B') セクション図 (1:100)

A 19.400 m



台地整形区画中央 (A-A') セクション図 (1:100)

第8図 菊間手永遺跡全体図

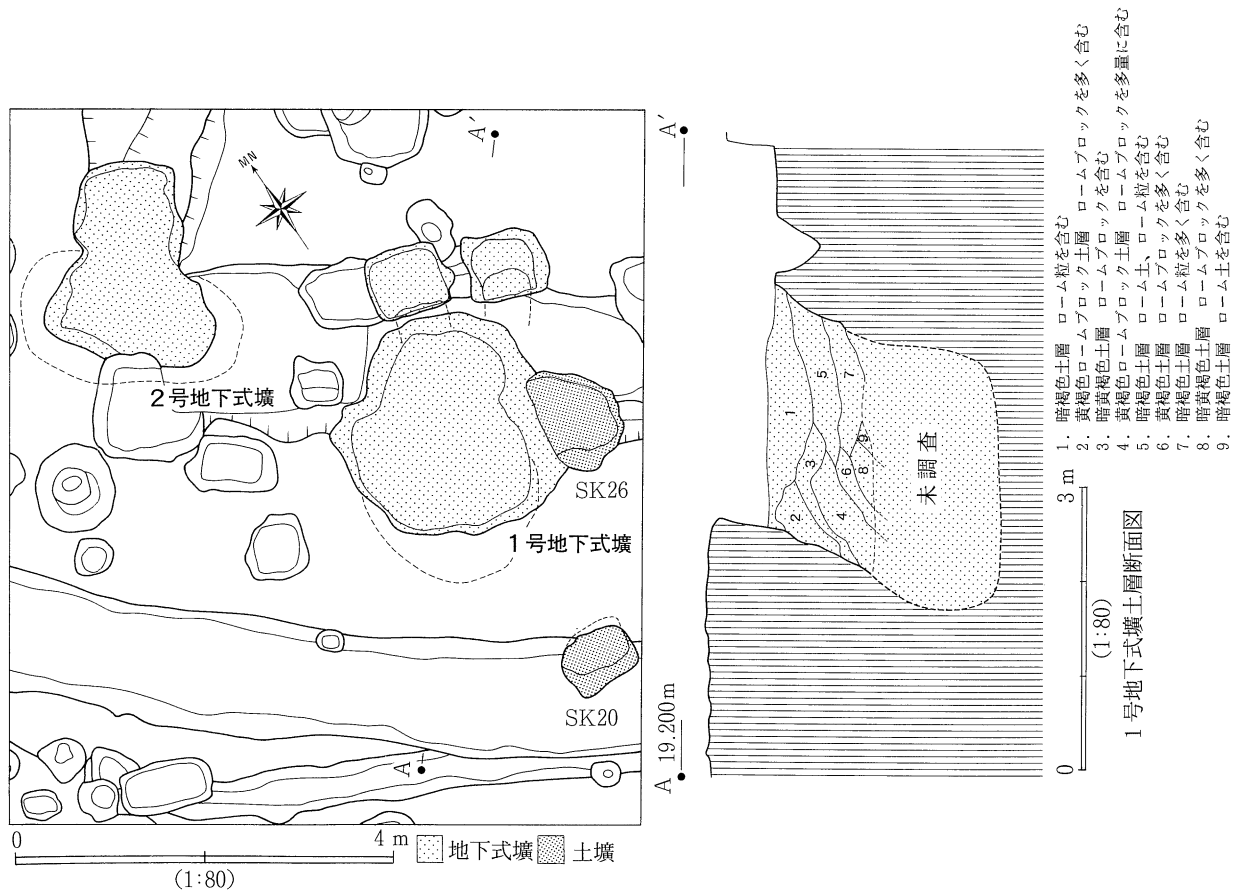
調査区西側に所在する墳丘の消失した手永台2号墳のものと考えられる²⁾。鉄滓については調査区北側の台地整形区画内の覆土からの出土で405点、4.75kgを量る。周辺に製鉄遺構の存在を伺わせる資料である³⁾。中世遺物については、陶磁器108点（舶載品4、国産品104）、砥石1点、五輪塔片・宝篋印塔片・板碑片各1点、渡来銭9枚などが出土している。陶磁器のうち舶載品については青磁碗3点、青磁花生1点（第12図7）で、いずれも竜泉窯系のもと思われる。国産陶器の構成は、在地系かわらけ36点、在地系内耳土器2点、瀬戸系皿26点（皿15、縁釉皿7、端反皿4）、瀬戸系鉢2（折縁深皿）、播鉢12点（瀬戸系9、在地系3）、常滑系甕15点、常滑系こね鉢1、瀬戸系平碗2点、器種不明破片8（南伊勢系土器4、瀬戸系陶器4）である。

台地整形区画（第8図）

台地整形区画は、部分的な調査のため全体の規模を把握することができなかったが、調査区北東側に方形に広がって造られているようである。区画内部は東側に向かってわずかに傾斜するが、ほぼ平坦に整形されている。整形部分の上場と下場の比高差は60～70cmを測る。ここから、地下式墳4基および性格不明の土坑5基・多数のピットが検出されている。また、この区画内は自然堆積したと思われる多量の砂粒状ローム土を含んだ厚さ30cm前後の黄褐色土で覆われていた。

1号地下式墳（第9図）

整形区画南側の斜面に位置し南側にのびている。竪坑は、主室北側の整形区画内に独立して付随している。主室は、直径約2.4mのほぼ円形で南側に向かって下膨れ状に膨らむ。自然埋没する前に天井部分が崩落しており、土層断面には暗褐色土とローム土が帯状にみられた。諸般の事情により完掘できなかったが、深さは推定で2.5m前後と思われる。竪坑については、長軸0.8m、短軸0.6mの方形



第9図 1. 2号地下式墳実測図

で、60cm程掘削してから主室に向かって斜め方向に下がるかまぼこ状のトンネルを掘り込んでいる。遺物については、覆土中から内耳土鍋（第12図11）が出土している。

2号地下式墳（第9図）

整形区画西側斜面に位置し南側にのびる。完掘できなかったため構造・規模等は不明であるが、主室北側に竪坑が付随する。主室は長軸2.4m、短軸1.4mの天井が盛り上がるかまぼこ状の形態と思われる。天井は中央部分が崩落していたものの残存していた。深さは推定で2m前後と思われる。

3号地下式墳（第10図）

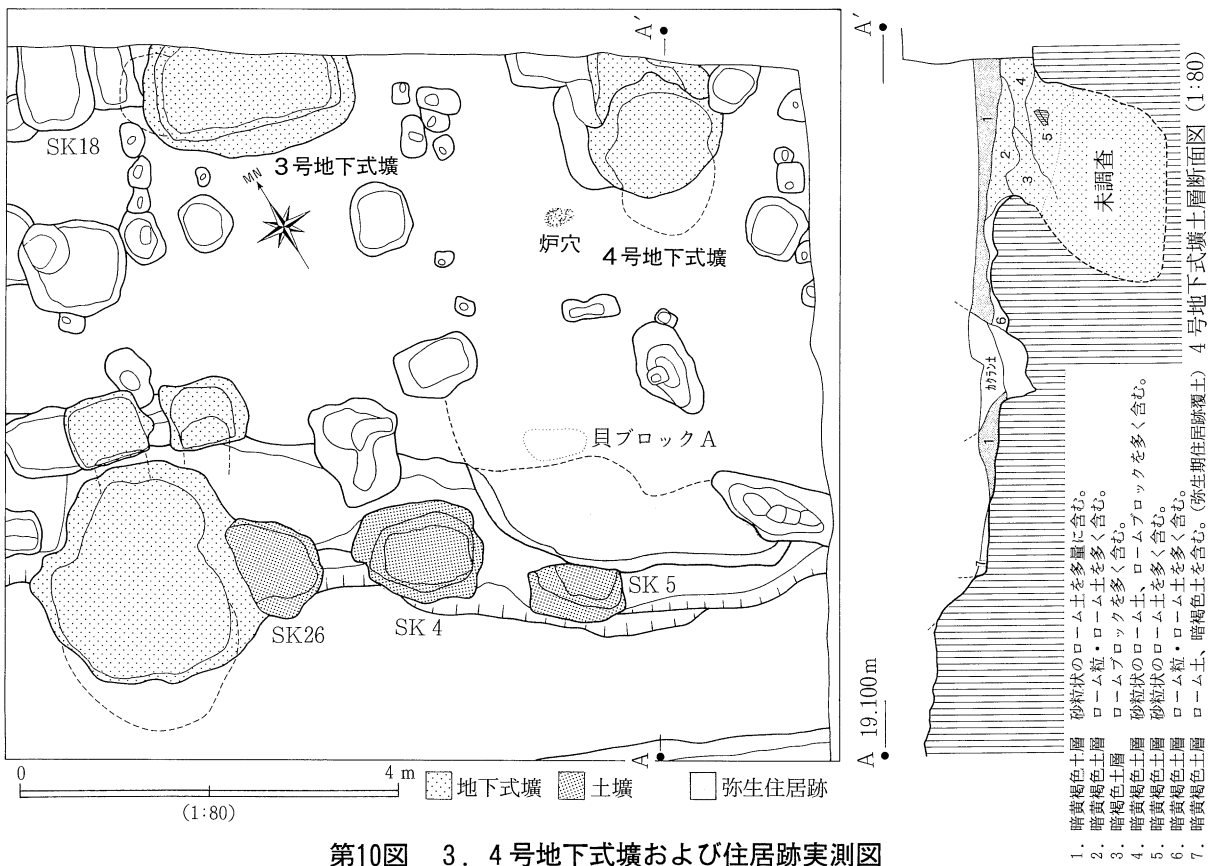
調査区北東端の整形区画内に位置する。主室部分のみの調査で、竪坑は北側調査区外にあるものと思われる。主室は長軸2.3m、短軸1.4mの長方形状で、深さ1.2mを測る。天井は自然埋没する前にほとんど崩落しており、大量のローム土で埋まっていた。崩落土中から砥石が出土している。

4号地下式墳（第10図）

調査区北東隅の整形区画内に位置する。主室部分の調査で、竪坑の位置は不明。主室の規模は長軸1.6m、短軸1.2m前後の楕円形で、南側に向かって袋状に膨らむ。完掘できなかったため、深さは不明だが2m前後と思われる。自然埋没する前に天井部分が崩落していた。覆土中から安山岩製の五輪塔笠石1点（第12図13）、北宗銭「元祐通寶」1枚が出土している。

土 墳（第8図）

11基の土墳が認められるが、これらの形態の大部分は楕円形や隅丸方形で、底部が平坦で両側に袋状に膨らむもの、片側に膨らむもの、底部にピットを有するもの、底部がすり鉢状のものなどバリエーションに富んでいる。このうち調査区中央部分から南側にかけての8基は、類似した形態で面的な



とまりをもっている。また、調査区中央の整形区画南側斜面に並列する3基についても一つの群としてとらえることができる。いずれの土壌についても、覆土の堆積状況は、ほとんどすべてがロームブロックを多量に含んでおり、人為的な埋没状況を示している。伴う遺物については、ほとんどみられないが、先ほどの整形区画南側斜面に並列する3基のうちの中央土壌の底面から巻き貝のアカニシが出土している。これらの土壌については、規模、形態、覆土状況などから墓壇の可能性のある遺構として考えている。

住居跡 (第10図)

調査区中央の整形区画南側で、硬化した床面部分が残っていたため、その存在が確認された。整形区画の造成時に削平された模様で、全体の形状・規模を捉えることはできないが、主軸を北東方向に持つ小判型の竪穴住居跡で、短軸4mである。炉は住居跡北寄り、整形区画の底面にかろうじて痕跡を残していた。遺物は、原位置を保っていたものはなかったが、この住居を壊して穿たれた土坑覆土内の弥生土器がこの住居に伴うものと考えている。(第11図1) また、図示した遺物のうち第11図2の片刃摩製石斧についても、住居範囲内からの出土で、伴う遺物と考えている。なお、この住居部分でかろうじて残っていた床の隣接から長軸70cm、短軸30cm、厚さ3cmのブロック状の貝層(貝ブロックA)が検出されている。

菊間手永遺跡検出の動物遺存体 (第8図・10図)

菊間手永遺跡の調査では、2地点の貝ブロックが検出されたが、いずれも比較的規模の小さなものであった。貝層サンプルの分析の結果、2地点の貝ブロックは右表のようにかなり異なった貝種組成を示した。ブロックAは、マルタニシ・ハマグリが主体をなし、ブロックBはイボキサゴが主体となる。この相違が貝層の形成時期の差によるものなのかどうかは、貝層に共伴する遺物がほとんどないため明らかにできないが興味深い事象である。特にブロックAの主体種となるマルタニシは、市内の縄文期貝塚ではほとんどみることはないが、東千草山遺跡や小田部向原遺跡などの弥生期の貝層中からは比較的多く検出されていることから、当遺跡検出のブロックAが弥生期の貝層である可能性もある。貝類以外では、ブロックAよりタイ科の臼歯1点、ネズミの大腿骨1点、ブロックBよりタイ科の切歯2点・臼歯3点、魚種不明の椎骨1点、ネズミ下顎切歯1点を検出できたにすぎない。

菊間手永遺跡検出貝ブロック内貝種組成

貝種 \ ブロック	ブロック A	ブロック B
イボキサゴ	19 (3.2)	3,660 (95.0)
マルタニシ	306 (51.2)	
ウミニナ	1 (0.2)	7 (0.2)
ツメタガイ		1
アカニシ		1
アラムシロ		21 (0.5)
アサリ	9 (1.5)	28 (0.7)
カガミガイ		1
ハマグリ	242 (40.5)	46 (1.2)
シオフキ	20 (3.4)	87 (2.3)
マテガイ		1

() 内の数字は比率を示す。

(忍澤成視)

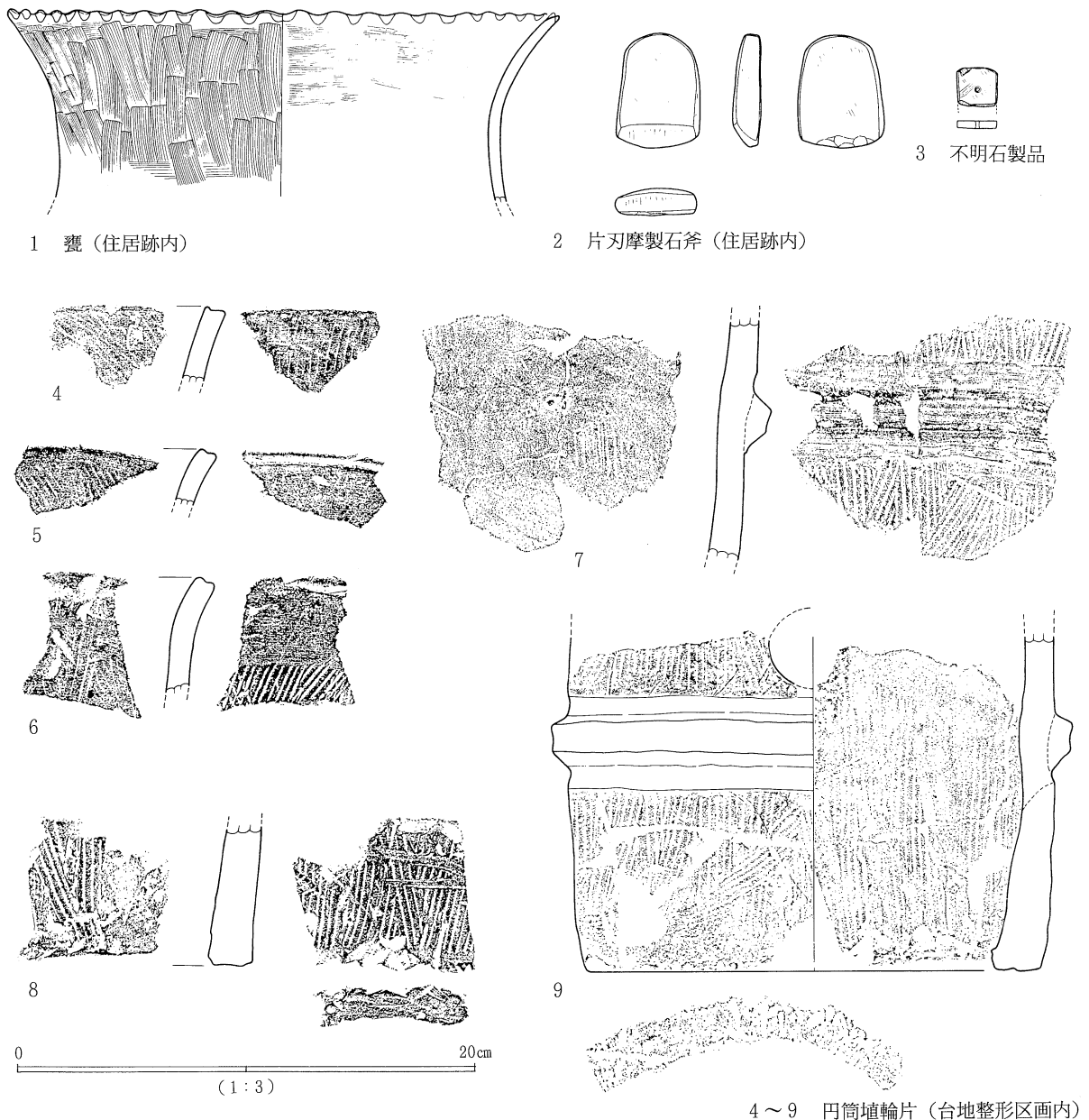
2. 小 結

今回の調査により、弥生時代竪穴住居跡と中世期に造られた台地整形区画および墓壇群の一端が明らかになった。住居跡については、伴うとみられる遺物から宮の台期の所産と考えている。隣接で行なわれた調査においても、同時期の住居跡が検出されており、中期の集落範囲を考える上での資料となろう。台地整形区画については、全体を把握できなかったため規模・性格など不明な部分が多いが、区画内で検出した地下式墳や土壌との新旧関係において、土層状況から後者が先に造られ、その後台

地整形を施した状況である。時期については、良好な遺物の出土がないため判断できないが、区画内から出土する遺物の状況からみて15世紀後半を中心とした時期と考えている。昭和47年に調査区北側で行なわれた調査でも多数の地下式墳や土壌がまとまりのある群としてとらえられており、中世後期においては当地域が墓域として位置づけられていたことと思われる。

註

- (1) 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 -昭和47・48年-』 千葉県教育庁文化課 1977
 近藤 敏「菊間手永貝塚」『市原市文化財センター年報 -昭和57・58年-』
 市原市文化財センター 1985
- (2) 『千葉県重要古墳群測量調査報告書 市原市菊間古墳群』 千葉県教育委員会 1995
- (3) 『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』 千葉県教育委員会 1986



第11図 菊間手永遺跡出土遺物



1 元祐通寶 (SK 2)



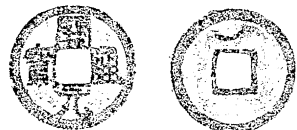
2 聖宋元寶 (SK 17)



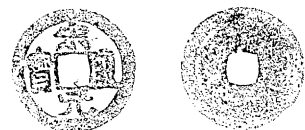
3 元豐通寶 (SK 18)



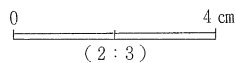
4 明道元寶 (SK 18)



5 開元通寶 (台地整形区画内)
調査区出土渡来銭



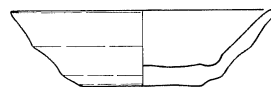
6 宋通元寶 (台地整形区画内)



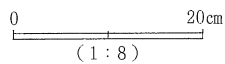
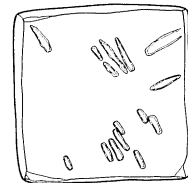
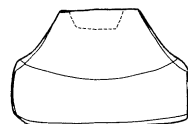
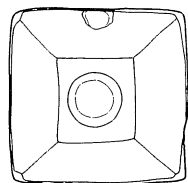
7 青磁花生 (台地整形区画内)



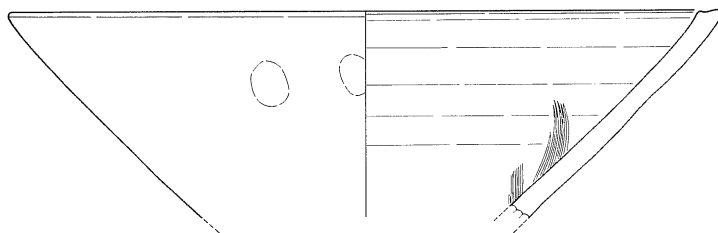
8 縁釉小皿 (台地整形区画内)



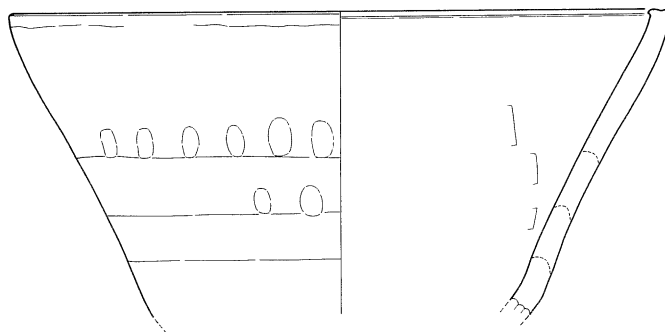
9 かわらけ (SK 17)



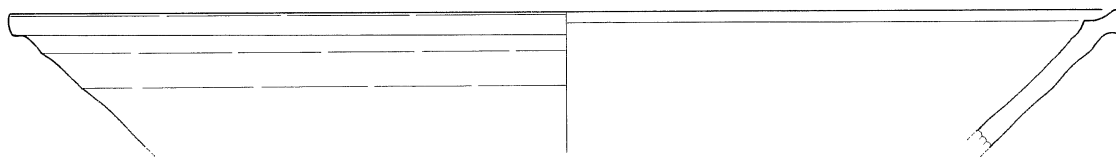
13 五輪塔笠石 (4号地下式墳)



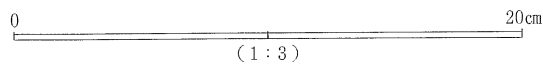
10 挿針 (台地整形区画内)



11 内耳土鍋 (1号地下式墳)



12 折縁深皿 (SK 18)



第12図 菊間手永遺跡出土中世遺物

第4章 下矢田城跡

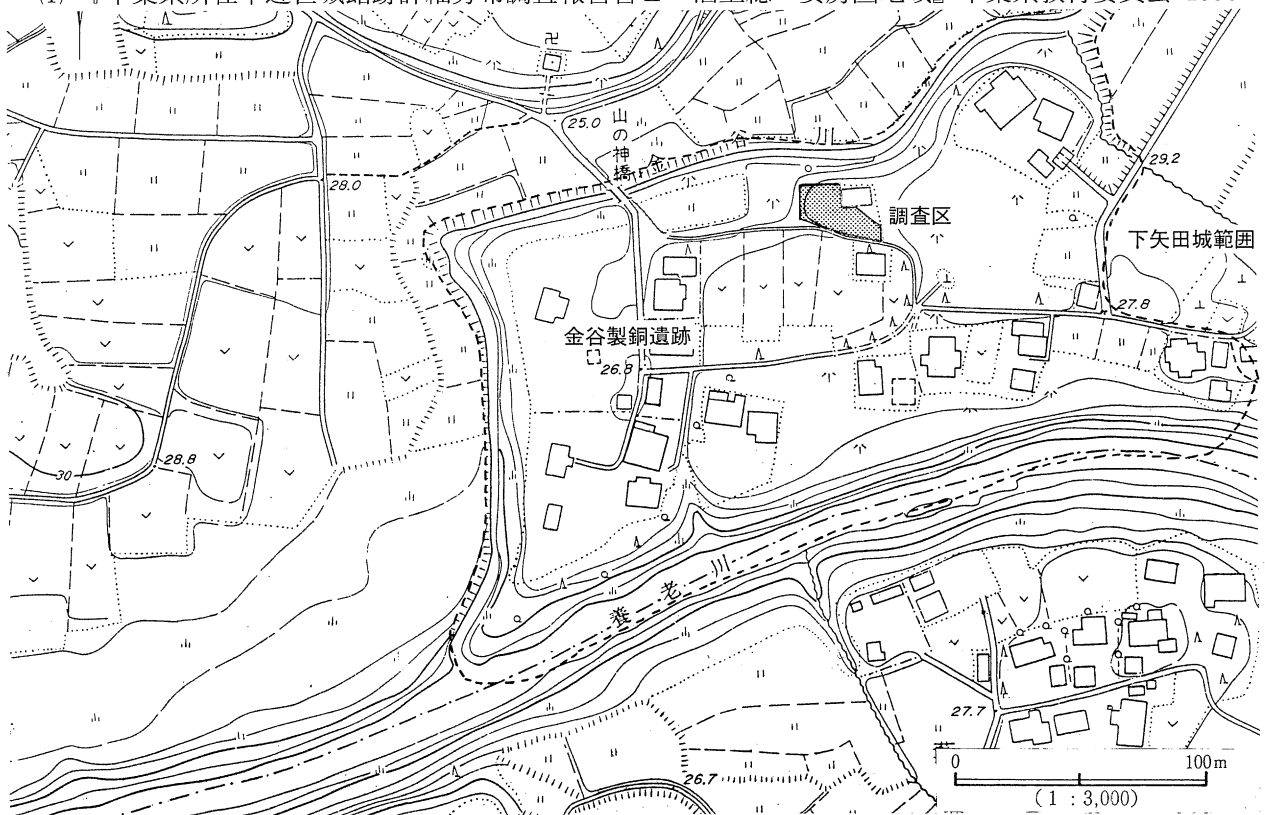
調査の概要

下矢田城跡は、養老川中流域平野の養老川本流とその支流にはさまれた標高27m前後の河岸段丘上に位置している。当遺跡の周囲には、池和田城跡や外部田城跡などの中世城郭が知られていたが、当城跡については、いままで確認されていなかった。平成7年に千葉県教育委員会が実施した県内中近世城館跡詳細分布調査により新たに発見された城跡である⁽¹⁾。概略では、東西300m、南北150mの縄張りで、河川を堀として利用し、その中に主郭・二の郭・三の郭を形成する。現状では、土塁・堀割などが残っている。今回の調査は、その主郭の一角で、東西40m、南北25mで周囲を高さ1m前後、幅3～4mの土塁を巡らす方形区画部分の発掘となった。

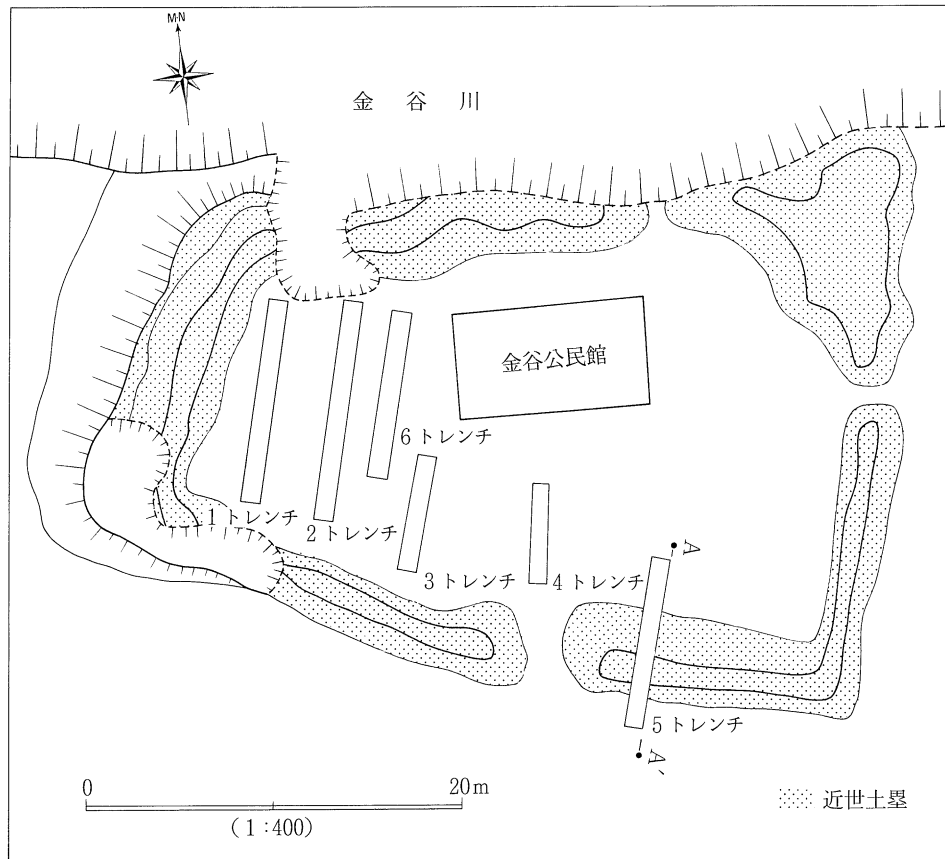
調査は、土塁の性格および区画内の建物等の検出を目的として行なった。調査の結果、土塁については、近世の土塁であることがわかった。また、区画内からは、城に関する建物等の施設については検出できなかった。近世土塁については、盛土部分直下の層から火山灰（宝永期）が検出され、また盛土内からは享保八年銘の墓石断片・灯明皿・腰鍔茶碗等が（第14図3・4）出土したことから、この土塁の築成時期は江戸時代後期頃と推定した。なお、このトレンチの地山（灰褐色砂層）直上層から平安時代前期頃の所産の土師器・須恵器が層状に多く出土している。住居跡等の遺構の可能性もありうるが床構造などは検出されず、今回の確認調査では性格を明らかにすることはできなかった。また、調査区2トレンチ内から、製練用の炉壁断片や銅滓が出土している。調査区南西の隣接には中世に活動が盛んであった「金谷の鋳物師」の推定地とされる金谷製銅遺跡が所在することから、関連の遺物であろう。

註

(1) 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ 旧上総・安房国地域』千葉県教育委員会 1996

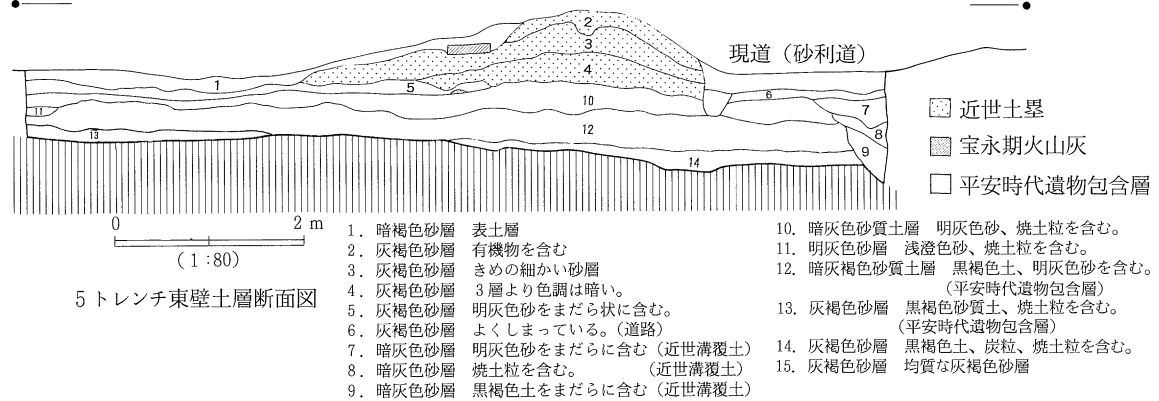


第13図 下矢田城跡周辺地形図



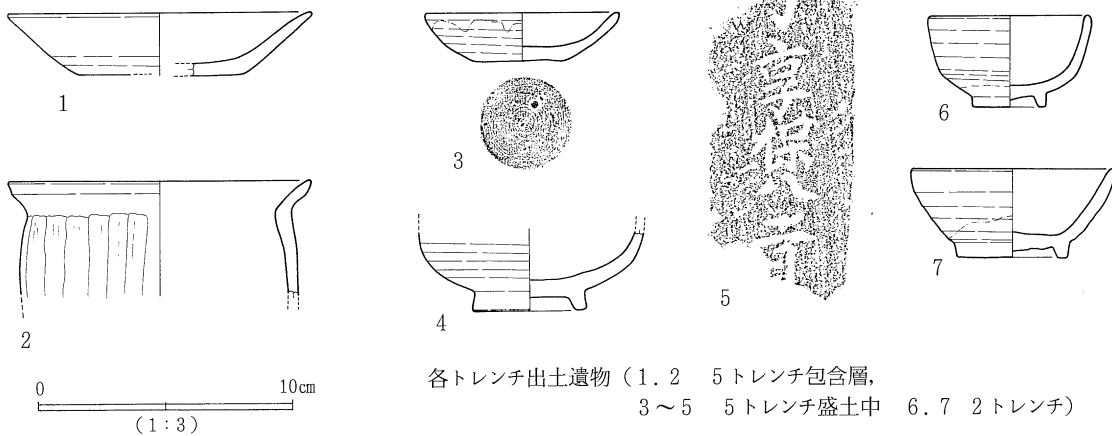
トレンチ配置図

A 28.200m



5 トレンチ東壁土層断面図

- | | | | |
|----------|---------------------|--------------|-------------------------------|
| 1. 暗褐色砂層 | 表土層 | 10. 暗灰色砂質土層 | 明灰色砂、焼土粒を含む。 |
| 2. 灰褐色砂層 | 有機物を含む | 11. 明灰色砂層 | 浅澄色砂、焼土粒を含む。 |
| 3. 灰褐色砂層 | きめの細かい砂層 | 12. 暗灰褐色砂質土層 | 黒褐色土、明灰色砂を含む。
(平安時代遺物包含層) |
| 4. 灰褐色砂層 | 3層より色調は暗い。 | 13. 灰褐色砂層 | 黒褐色砂質土、焼土粒を含む。
(平安時代遺物包含層) |
| 5. 灰褐色砂層 | 明灰色砂をまだらに含む (近世溝覆土) | 14. 灰褐色砂層 | 黒褐色土、炭粒、焼土粒を含む。 |
| 6. 灰褐色砂層 | よくしまっている。(道路) | 15. 灰褐色砂層 | 均質な灰褐色砂層 |
| 7. 暗灰色砂層 | 明灰色砂をまだらに含む (近世溝覆土) | | |
| 8. 暗灰色砂層 | 焼土粒を含む。 (近世溝覆土) | | |
| 9. 暗灰色砂層 | 黒褐色土をまだらに含む (近世溝覆土) | | |



各トレンチ出土遺物 (1. 2 5 トレンチ包含層, 3~5 5 トレンチ盛土中 6. 7 2 トレンチ)

第14図 下矢田城跡全体図および出土遺物

第5章 二日市場遺跡

調査の概要

二日市場遺跡は、養老川中流域平野の周囲より1～3m高い島状微高地に位置している。この微高地を取り巻く低地は、かつて養老川が蛇行して流れていた河道跡で、遺跡はちょうど袋状の中央部分に所在する。この袋状微高地一帯は、白鳳期の寺院跡と考えられている二日市場廃寺跡の遺跡範囲で、付近より古瓦が多く出土することで知られていた。昭和58年には県の重要遺跡確認調査^①により、掘立柱建物跡、溝等の遺構と花（雷）文八葉複弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦、格子叩目文平瓦等の多量の瓦が検出されている。

今回の調査は、地区公民館の建替えによる確認調査で、位置的に二日市場廃寺跡の推定範囲に入ることから、関連遺構の検出が考えられていた。

調査の結果、調査区全体に広がる整地土層と南北方向に走る溝跡1条、掘立柱建物跡と考えられる柱穴が検出された。このうち整地土層については、第15図のトレンチ断面図の層序のように黒褐色粘質土層直上に灰白色粘土ブロックを主体とした灰褐色粘質土を厚さ10～15cmにわたって面的に整地されていた。今回検出した溝跡および掘立柱建物跡と考えられる柱穴の遺構は、この整地土層を掘り込み面としている。南北方向に走る溝跡は、座標北に対して西へ約6度偏位している。溝上端2.5m、下端2m、掘り込み面からの深さ0.5mを測り、断面は逆台形を呈している。溝の覆土となる層からは、多量の瓦・土師器・須恵器が出土している。柱穴については、東西1間分（1.5m）と方向不明なもの1基を検出した。いずれも柱掘り方は直径30cm前後の円形を呈している。トレンチ調査のため、建物の規模・配列についてはわからなかった。

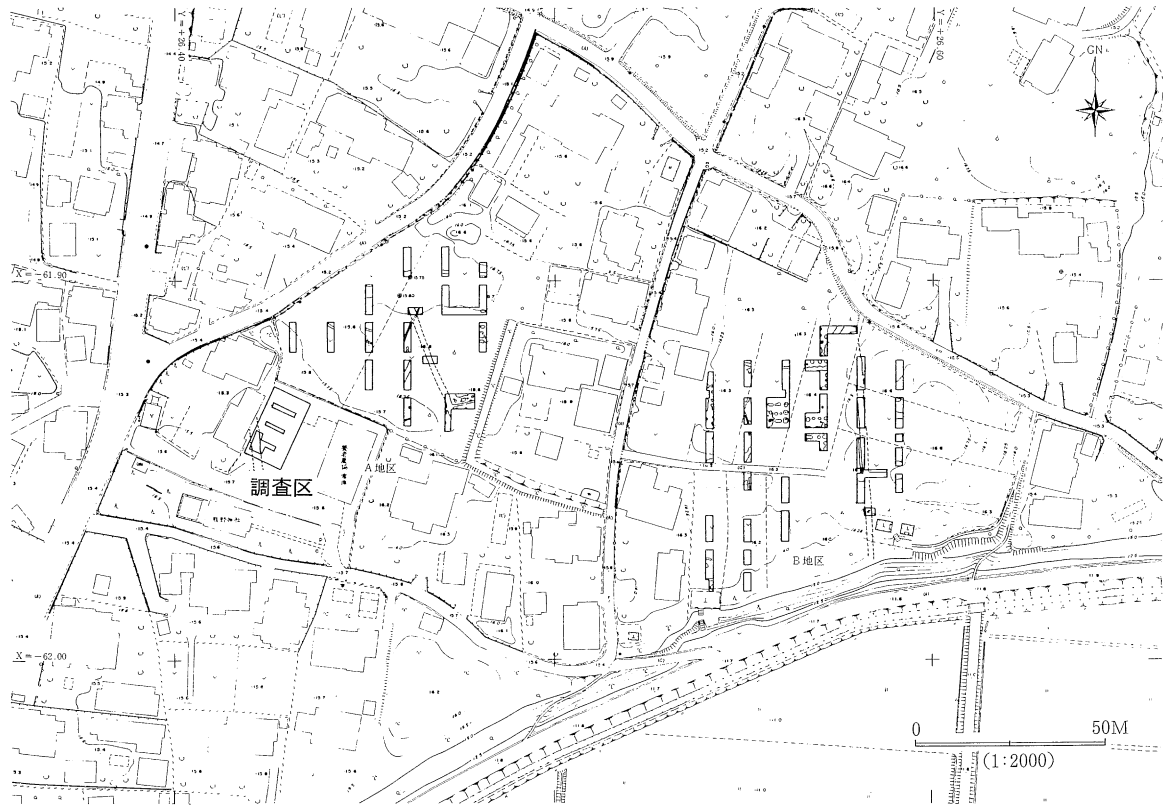
遺物は、瓦・土師器・須恵器・鉄滓などが出土したが、そのほとんどは南北方向に走る溝覆土からのものである。このうち瓦については、平瓦・丸瓦のみである。昭和58年の調査時に郷堀英司氏が分類されているが、今回出土した瓦はこの範ちゅうにはいるもので、新たな異種の瓦は無かった。第16図1～5は格子系平瓦で、このうち1・2は郷堀氏分類の格子系A類で、凸面に1.2cm×1.6cm前後の格子目叩きを施す。凹面は布目痕を消すように縦方向のヘラ削り調整を施す。3～5は格子系C類で、凸面に4mm×5mm前後の格子目叩きを施し、その後ヘラ削りやナデ調整を行なうために無文なる部分が多くなっている。凹面は布目や模骨痕をそのまま残している。いずれも桶巻き造りである。6～8は丸瓦である。二日市場廃寺跡では行基式と玉縁がみられるが、今回のものは行基式と考えられる。凸面は全面ヘラ削りやナデ調整を施す。凹面は布目がそのまま残されている。

9・10は須恵器坏・11は土師器坏・12は須恵器甕・13は土師器甕である。いずれも溝覆土中の黒褐色土層から、集中した状態で出土している。須恵器坏については、体部下半をヘラ削りし、底部は回転糸切り後、ヘラ削りを施している。胎土は、1mm程度の黒色粒子^②を含む。焼成は甘く部分的に酸化焰状態を呈している。

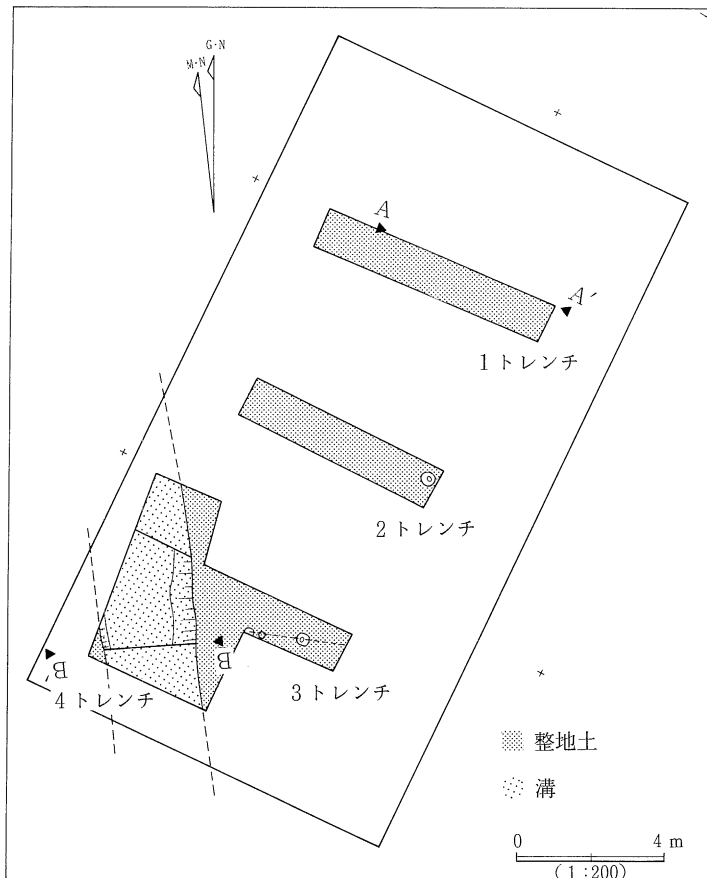
今回限られた面積のため、直接には二日市場廃寺跡と判断できる遺構は確認できなかったが、検出した溝および整地土層については、覆土の出土遺物や土層状況から奈良時代頃の所産と考えている。

註

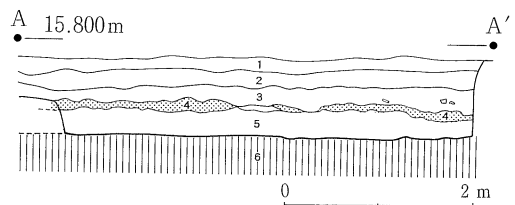
- (1) 郷堀英司『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会 1984年
- (2) 高橋康男氏によれば、市原市大和田窯跡の製品に特徴ある胎土ということである。



二日市場遺跡周辺地形図（昭和58年度調査報告書の地形図に今回調査区を加筆）

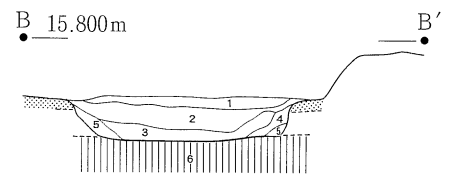


二日市場遺跡トレンチ配置図



1トレンチ土層断面図（A-A'）（1:80）

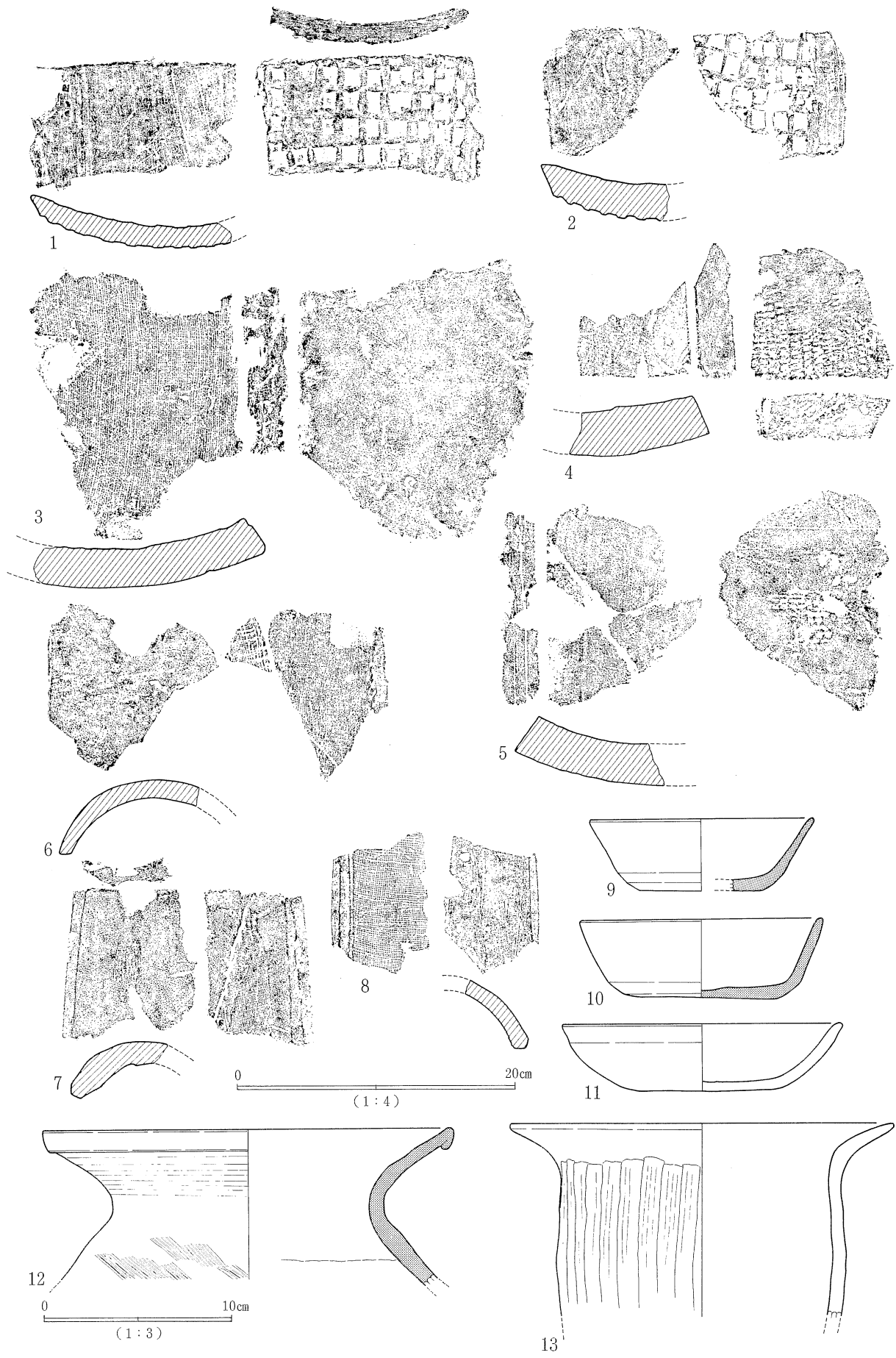
1. 黄褐色砂層 表土層 客土
2. 茶褐色砂質土層 炭、酸化鉄分を含む
3. 暗茶褐色粘質土層 焼土粒を含む。
4. 灰褐色粘質土層 灰白色粘土+黒褐色土
5. 黒褐色粘質土層 酸化鉄分を多く含む
6. 黒灰色粘土層 灰白色粘土をまだら状に含む



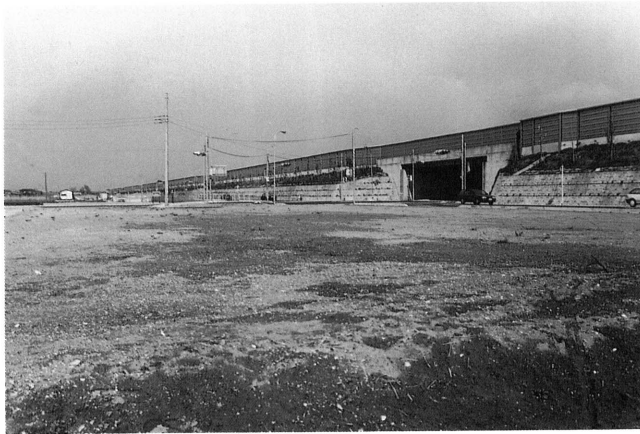
溝覆土断面図（B-B'）（1:80）

1. 暗灰褐色粘質土層 酸化鉄分を多く含む
2. 黒褐色粘質土層 酸化鉄分を多く含む。遺物を多く含む
3. 黒色粘質土層 灰褐色土粒を多く含む
4. 黒灰褐色粘質土層 灰褐色粘土ブロックを多量に含む
5. 黒褐色粘質土層 灰褐色粘土ブロックを含む
6. 黒灰色粘土層 灰白色粘土をまだら状に含む

第15図 二日市場遺跡周辺地形図および全体図



第16図 二日市場遺跡出土遺物 (瓦類 1/4、土器 1/3)



市原条里制遺跡 調査前全景



市原条里制遺跡 Aトレンチ状況



市原条里制遺跡 Bトレンチ状況



市原条里制遺跡 Aトレンチ土層状況



椎津五霊台遺跡 調査前全景



椎津五霊台遺跡 調査状況



椎津五霊台遺跡 遺構検出 (5グリット)



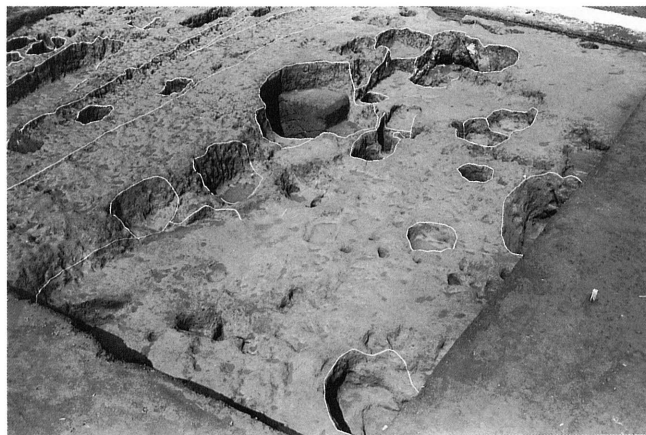
椎津五霊台遺跡 遺物出土状況 (5グリット)



菊間手永遺跡 調査前全景



遺跡全景



台地整形区画部分



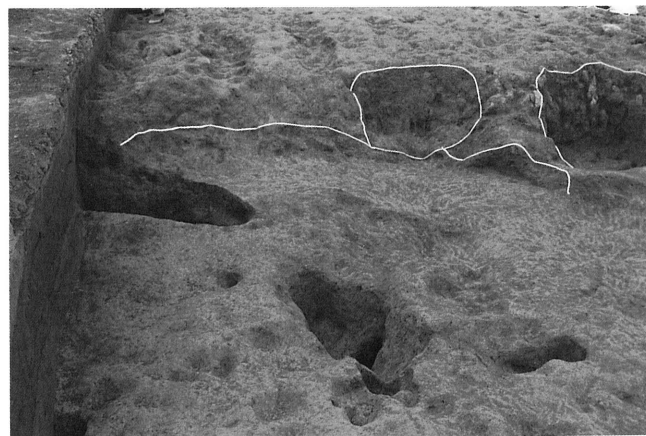
同土層状況



地下式壙検出状況 (左 1号, 右 2号)



4号地下式壙検出状況



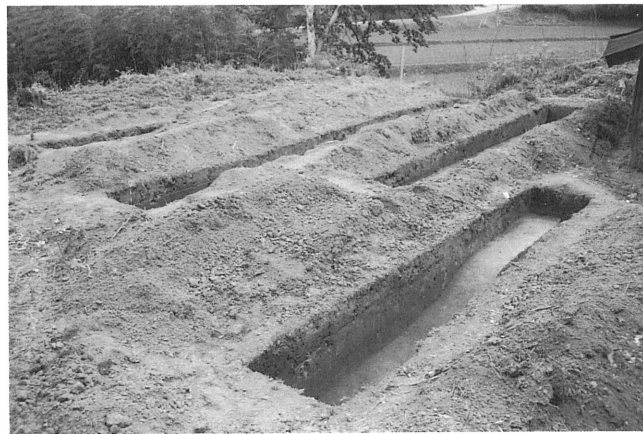
住居跡検出状況



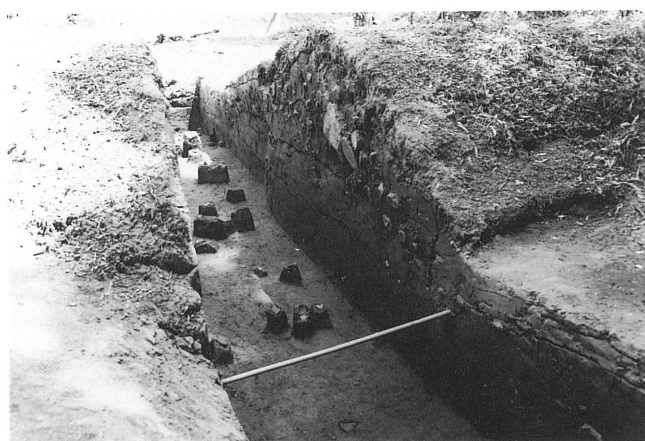
中世土壙検出状況



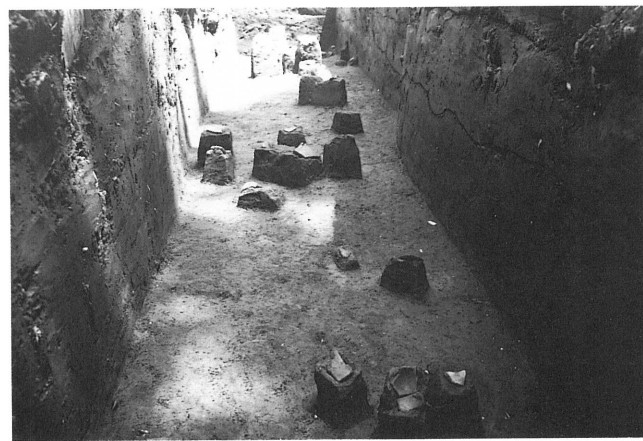
下矢田城跡 調査前全景



下矢田城跡 調査状況



下矢田城跡 5トレンチ調査状況



下矢田城跡 同 遺物出土状況



二日市場遺跡 調査前全景



二日市場遺跡 調査状況



二日市場遺跡 溝検出状況

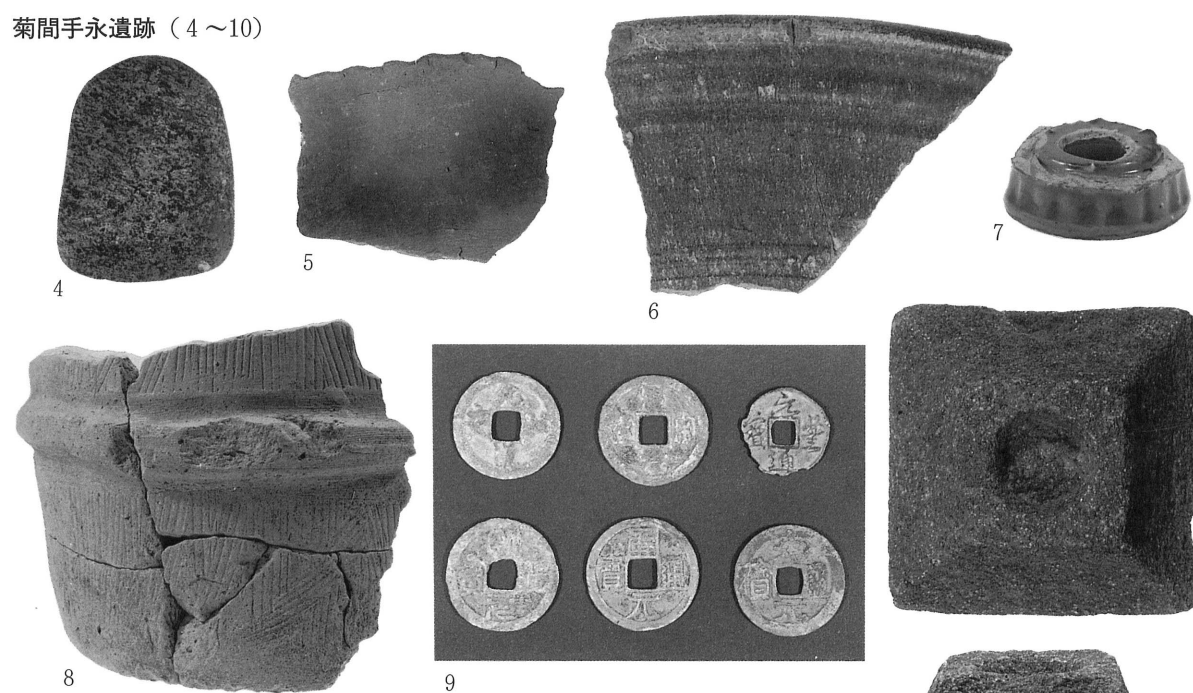


二日市場遺跡 同 遺物出土状況

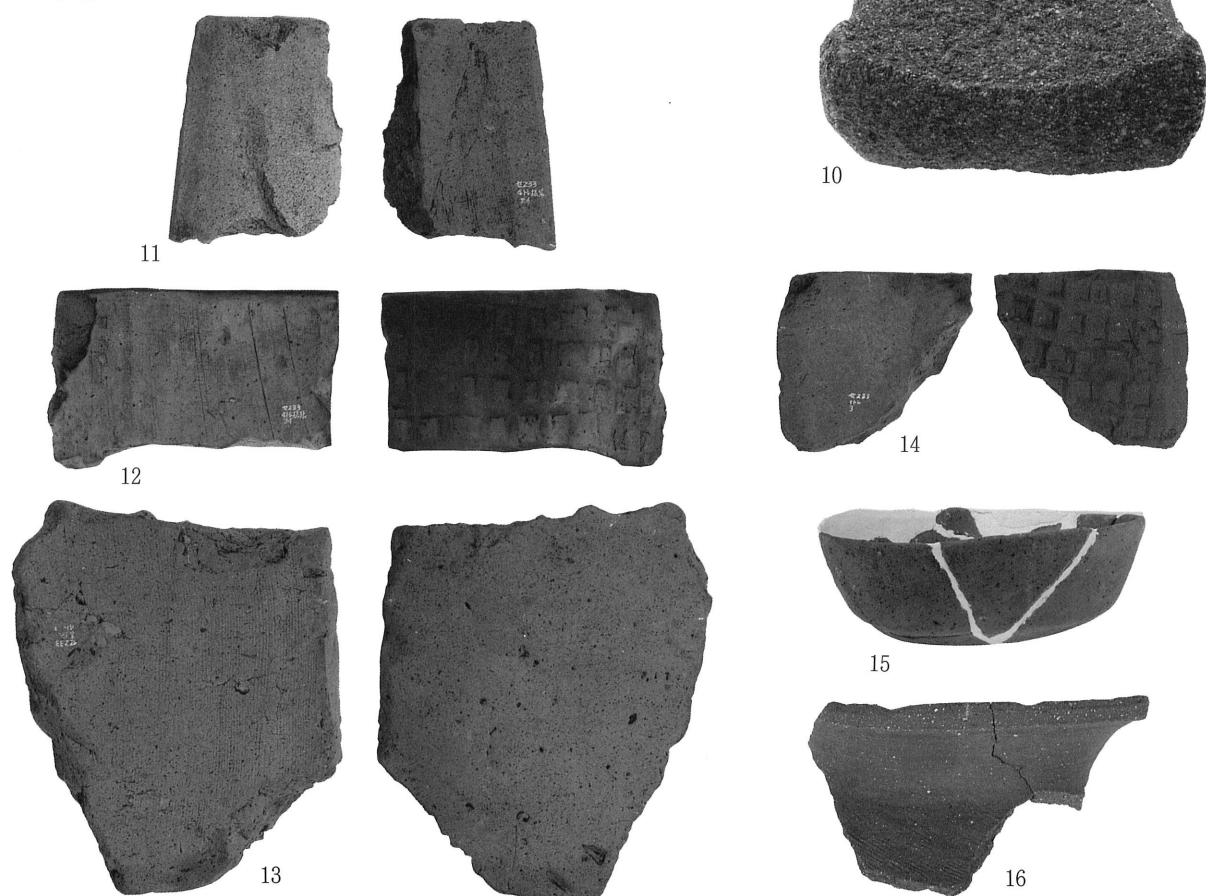
出土遺物
椎津五霊台遺跡
(1~3)



菊間手永遺跡 (4~10)



二日市場遺跡 (11~16)



報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせいほちねんどいちほらしないいせきはくつちょうさほうこく							
書名	平成8年度市原市内遺跡発掘調査報告							
副書名	市原条里制遺跡・椎津五霊台遺跡・菊間手永遺跡・下矢田城跡・二日市場遺跡							
巻次								
シリーズ名	市原市内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番	第10冊目							
編著者名	小出紳夫・高橋康男・忍澤成視							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290 千葉県市原市能満1, 489番地				TEL 0436-41-9000			
発行年月日	西暦 1997年3月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちはらじょうりせいせき 市原条里制遺跡	ちばけんいちほらしきくま 千葉県市原市菊間 あざろくぶちべんざいてん 字六洲弁才天267,268-1	12219	セ223	35度 31分 37秒	140度 08分 00秒	19960408～ 19960411	34㎡	給油所建設に伴う埋蔵文化財調査
しいづごりょうだいいせき 椎津五霊台遺跡	ちばけんいちほらししいづ 千葉県市原市椎津 あざごりょうだい 字五霊台662,663	12219	セ224	35度 27分 59秒	140度 02分 22秒	19960415～ 19960425	298㎡	宅地造成に伴う埋蔵文化財調査
きくまてながいせき 菊間手永遺跡	ちばけんいちほらしきくま 千葉県市原市菊間 あざてなが 字手永2,183	12219	セ225	35度 32分 10秒	140度 08分 45秒	19960412～ 19960522	190㎡	個人住宅建設に伴う埋蔵文化財調査
しもやたじょうあと 下矢田城跡	ちばけんいちほらししもやた 千葉県市原市下矢田 あざかなや 字金谷192	12219	セ229	35度 22分 51秒	140度 09分 19秒	19960523～ 19960610	52㎡	公民館建設に伴う埋蔵文化財調査
ふつかいちばいせき 二日市場遺跡	ちばけんいちほらし 千葉県市原市 ふつかいちば 二日市場599の一部	12219	セ233	35度 26分 29秒	140度 07分 28秒	19960729～ 19960731	30㎡	公民館建設に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市原条里制遺跡	包蔵地	中・近世			土師器、中・近世陶器			
椎津五霊台遺跡	集落跡 古墳	古墳時代 平安時代 中世	古墳時代住居跡18、円墳1、平安時代住居跡1、土坑6、中世溝3		須恵器、土師器		古墳時代後期の集落跡	
菊間手永遺跡	集落跡 墓域	弥生時代 中世	弥生時代竪穴住居跡1、中世台地整形、地下式墳4、中世土壇11		弥生土器、須恵器、土師器、埴輪、中・近世陶磁器、鉄滓		弥生時代集落跡・中世の墓域群	
下矢田城跡	包蔵地	平安時代 江戸時代	近世土塁1、平安時代包含層1		須恵器、土師器、近世陶器、銅滓			
二日市場遺跡	寺院跡	奈良時代	奈良時代掘立柱建物跡2、奈良時代溝跡1、奈良時代整地土層		須恵器、土師器、瓦		二日市場廃寺跡の関連遺構？	

平成8年度市原市内遺跡発掘調査報告

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月28日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

市原市能満 1,489 番地

発行 千葉県市原市教育委員会

市原市惣社1,040-1 番地

印刷 三陽工業株式会社

市原市五井5,510-1 番地